

ドイツ社会民主党史文献目録

——ドイツ社会民主党内の帝国主義論関係邦語文献目録(3)——

長 島 伸 一

この文献目録は、「E.ベルンシュタイン、K.カウツキー、R.ルクセンブルク文献目録」および「R.ヒルファディング文献目録」の続編をなすものである。当初は、上記四名の人物文献目録を第1次大戦以前の時期に限定して作製する予定であったが、カード作りの過程でその範囲が両大戦期にまで広げられ、その対象もドイツ社会民主党・ドイツ共産党関係のテーマ別文献目録と、その他の人物文献目録とが追加されて成ったものである。したがって、第2次大戦後の東西ドイツの諸政党(SED, SPD, DKP)の研究は収録されていない。

一般に、主題別文献目録は、その収録範囲と採用基準とが極めて難しいとされている。本稿に限って言えば、ドイツ革命やコミンテルンやナチズムなどの関連テーマから SPD・KPD 研究を行なっている文献については、タイトル中にそれが明記されているものを除けば、限られた範囲でしか収録されていない。それに対して、ドイツ中央党、オーストリア社会民主党をはじめとする周辺諸国の社民党、第2インターナショナルなどを対象とした論文のうち部分的に採用したものもある。したがって、本稿は、いかなる意味でも網羅的なものではないことを、あらかじめおことわりしておきたい。

既発表の二つの文献目録の目次には、「V 帝国主義論史・方法論関係邦語文献目録」が予定されていたが、種々な理由から今回は見送ることにした。いずれ機会が与えられれば、「経済学史・社会思想史の通史および方法に関する文献目録」へと拡充して発表したいと考えている。

基本カードの作製方法およびそれを補足する書誌類については、最初の目録の冒頭で述べておいたので繰り返しは避ける。ここでは、本文献目録作製のために追加的に利用した歴史学・政治学に関する書誌類に限り、以下に掲げておく。国立国会図書館編『議会政治文献目録——議会開設70年記念』(1961年)／『史学雑誌』所収の「歴史学界——回顧と展望」および「史学文献目録(西洋史)」／歴史学研究会編『歴史学の成果と課題』全6冊、岩波書店、1950～55年／同編『歴史学研究』196, 213, 221, 1956～58年／同編『現代歴史学の成果と課題』全4巻、青木書店、1974～75年(同編, II, 全4巻, 1982年6月～刊行中)／国際歴史学会議日本国内委員会編『日本における歴史学の発達と現状』全4巻、東京大学出版会、1959～76年／日本政治学会編『年報 政治学』岩波書店、1950年より経年刊行／『政治学に関する雑誌文献目録』(昭和23年—昭和39年)(昭和40年—昭和49年)、日外アソシエーツ、1981年、1978年(なお、この雑誌文献目録シリーズには、他に経済史／経済学／政治・社会問題／哲学・思想などがある)。

ベルンシュタインをはじめとする四名以外の邦訳文献の原典を表記するさい典拠とした書誌は以下のとおりである。(ただし、現物にあたれなかった書誌も併記しておいた。)

(1) バウアー *Werkausgabe, hrsg. von der Arbeitergemeinschaft für die Geschichte der österreichischen Arbeiterbewegung*, 4 Bde., Wien 1975. Norio Yonekawa 「Otto Bauer 文献——Bibliographie über Otto Bauer」『経済論集』〔新潟大〕20, 1975.

(2) ベーベル Ernst Schraepler, *August-Bebel-Bibliographie*, Düsseldorf 1962. 西川正雄〔→VI-60〕

(3) ホブソン E. E. Nemmers, *Hobson and Underconsumption*, Amsterdam 1956, pp. 144-48. 清水嘉治〔→VI-167〕

(4) K. リーブクネヒト Heinz Gittig, *Karl Liebknecht, Rosa Luxemburg. Ein Auswahlverzeichnis der Schriften von und über Karl Liebknecht und Rosa Luxemburg*, Berlin 1957. (Biographie: Willy Kerff, *Karl Liebknecht 1914 bis 1916. Fragment einer Biographie*, Berlin 1967. Heinz Wohlgenuth,

Karl Liebknecht, Stationen seines Lebens, Berlin 1977.)

(5) W.リープクネヒト Werner Wendorff, *Schule und Bildung in der Politik von Wilhelm Liebknecht*, Berlin 1978.

(6) メーリング *Gesammelte Schriften*, hrsg. von Th. Höhle, H. Koch u. J. Schleifstein, 15 Bde., Berlin 1960-67. (Biographie: Thomas Höhle, *Franz Mehring. Sein Weg zum Marxismus*, Berlin 1956. Josef Schleifstein, *Franz Mehring. Sein marxistisches Schaffen 1891-1919*, Berlin 1959.)

(7) パネクーク Hans Manfred Bock, Anton Pannekoek in der Vorkriegs-Sozialdemokratie. Bericht und Dokumentation, *Jahrbuch Arbeiterbewegung*, III, 1975.

(8) パルヴス W. B. Scharlau u. Z. A. Zeman, *Freibeuter der Revolution, Parvus-Helphand: Eine politische Biographie*, Köln 1964. English tr., *The Merchant of Revolution, the Life of A. I. Helphand (Parvus) 1867-1924*, London 1965.

(9) ツェトキーン Heinz Gittig, *Clara Zetkin. Eine Auswahlbibliographie der Schriften vvn und über Clara Zetkin*, Berlin 1957. (Biographie: Luise Dornemann, *Clara Zetkin. Ein Lebensbild*, Berlin 1957. 4. Aufl., Berlin 1962.)

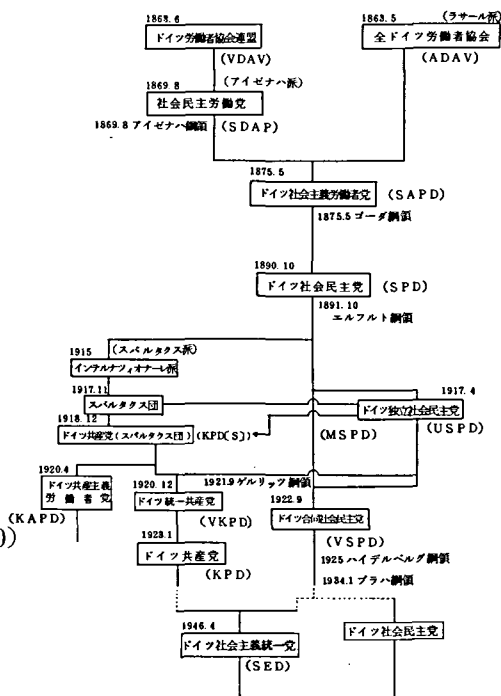
目次

- I ベルンシュタイン邦語文献目録
- II カウツキー邦語文献目録
- III ルクセンブルク邦語文献目録——以上本誌前号
- IV ヒルファディング邦語文献目録——『大学院紀要』9
- V ドイツ社会民主党・ドイツ共産党関係邦語文献目録
- VI 個人別邦語文献目録
 - a バウアー (Otto Bauer, 1881~1938)
 - b ベーベル (August Bebel, 1840~1913)
 - c ベーア (Max Beer, 1864~ ca. 1940)
 - d クーノ (Heinrich W. C. Cunow, 1862~1936)
 - e エンゲルス (Friedrich Engels, 1820~1895)*
 - f ホブソン (John A. Hobson, 1858~1940)**
 - g リープクネヒト (Karl Liebknecht, 1871~1919)
 - h リープクネヒト (Wilhelm Liebknecht, 1826~1900)
 - i メーリング (Franz Mehring, 1846~1919)
 - j パネクーク (Anton Pannekoek, 1873~1960)
 - k パルヴス (Parvus, 1867~1924)
 - l ツェトキーン (Clara Zetkin, 1857~1933)

* 晩年のエンゲルスを扱った文献に限定した。この時期のエンゲルス自身の著作については、Marx-Engels-Werke, Bd. 21-22. を、また文献紹介については、VI-123の杉原論文およびVI-121, 125の坂脇論文をそれぞれ参照されたい。〔エンゲルスの二つの回想録(栗原佑記『エンゲルスの追憶』国民文庫, 1971年6月, および栗原佑記『モールと将軍——マルクス=エンゲルスの回想』大月書店, 1976年3月/国民文庫, 全2冊, 1976年10月)には、本稿に関連のある人々の追憶が含まれているが、それらは本目録には収録されていない。〕

** SPDとの直接的つながりはないが、帝国主義論史との関連から本目録に収録した。

ドイツ社民党系統図



V ドイツ社会民主党・ドイツ共産党関係邦語文献目録

- 1 斯波〔貞吉〕「独逸社会党大会」『平民新聞』（週刊）1，1903年11月15日（p. 2）
- 2 小野塚喜平次「独乙帝國主義議員総選挙ニ現ハレタル社会衆民党ノ勢力増加」『国家学会雑誌』（東京帝大）19-2，1905年2月（pp. 10~39）／『欧州現代立憲政況一斑』博文館，1908年10月（pp. 96~140）
- 3 佐藤丑次郎「政党論上ヨリ独逸社会民主党ヲ論ス」『京都法学会雑誌』（京都帝大）8-1，1913年1月（pp. 14~47）. 8-3，1913年3月（pp. 62~94）
- 4 高野岩三郎「戦時ニ於ケル独逸ノ社会民主党及ビ職工組合」(1) (2) (3)『国家学会雑誌』（東京帝大）29-10，1915年10月（pp. 1~9）. 29-11，1915年11月（pp. 83~92）. 29-12，1915年12月（pp. 24~36）
- 5 森戸辰男「戦争ト独逸社会民衆党」『法学志林』（法政大）18-6，1916年6月（pp. 17~37）
- 6 小野塚喜平次「独逸社会党ノ穏和化的傾向」『欧州現代政治及学説論集』博文館，1916年7月（pp. 95~153）
- 7 〔無署名〕「独逸ト社会党」『外事彙報』（外務省政務局）9，1916年9月（pp. 82~84）
- 8 森戸辰男「独逸社会民衆党に於ける社会改良思想の発展」(1)『国家学会雑誌』30-9，1916年9月（pp. 143~156）
- 9 桑田熊蔵「独逸社会党ニ於ケル硬軟兩派ノ衝突」『金井教授在職25年記念 最近社会政策』有斐閣，1916年11月（pp. 25~46）
- 10 樹下石上人「大戦渦中の独逸社会民主党」『東方時論』2-10，1917年*
- 11 橋田民蔵「独逸社会民主党員の軟化論（利己心是認の資本労働調和論）」『国家学会雑誌』31-6，1917年6月（pp. 141~145）
- 12 山口義一「戦時独逸に於ける社会民主党」『法政論叢』9，1918年*
- 13 米田庄太郎『晩近社会思想の研究』全3冊，弘文堂書房，1919年4月. 1920年1月. 1923年*
- 14 山川均「独逸社会党の三派鼎立（Three sections of German Socialism）」『新社会』1919年6月*／『山川均全集』2，勁草書房，1966年10月（pp.191~200）
- 15 稲原勝治編著『最近の独逸』外交時報社（通俗国際文庫1），1919年11月（2，14，527p.）
- 16 煙山専太郎編著『独逸社会民主党』外交時報社（通俗国際文庫2），1919年12月（1，12，451p.）
- 17 河田嗣郎「戦後独逸の社会主義運動」(1)(2)『経済論叢』12-5，1921年5月（pp. 59~68）. 12-6，1921年6月（pp. 47~59）
- 18 堀切善次郎「独逸社会民主党政綱改正案」『社会政策時報』15，1921年11月（pp. 239~249）
- 19 蠟山政道「独逸社会民主党ゲーリッツ綱領」『国家学会雑誌』35-12，1921年12月（pp. 114~125）
- 20 井口孝親「独逸社会民主党の新綱領」『我等』4-2，1922年2月（pp. 72~88）
- 21 井口孝親「多数・独立兩社会党合同問題の回顧と予測」『我等』4-6，1922年6月（pp. 39~54）
- 22 安井英二「大戦後に於ける独逸の社会運動」『日本法政新誌』（日本大）19-2，1922年2月（pp. 59~87）
- 23 守田有秋「独逸革命及其前後」『表現』（二松堂書店）2-10，1922年／表現社編『最近の独逸研究』（→V-29），（pp. 226~233）
- 24 波多野鼎「新装の独逸社会民主党」『表現』2-10，1922年／『最近の独逸研究』（pp. 27~39）
- 25 佐野学「スバルタカス団」『表現』2-10，1922年／『最近の独逸研究』（pp. 180~186）
- 26 猪俣津南雄「新独逸の共産主義運動」『表現』2-10，1922年／『最近の独逸研究』（pp. 187~198）
- 27 野坂鉄「新独逸の新しい労働組合運動」『表現』2-10，1922年／『最近の独逸研究』（pp. 199~209）
- 28 名倉聞一「新独逸の政党政派」『表現』2-10，1922年／『最近の独逸研究』（pp. 40~48）
- 29 表現社編『最近の独逸研究』二松堂書店，1923年1月（4，290，28，51p.）→V-23~28
- 30 井口孝親「独逸兩社会党合同完成の前史——ラーテナウ暗殺の政治的意義」(1)(2)『我等』5-2，1923年2月（pp. 1~8）. 5-3，1923年3月（pp. 1~8）
- 31 北吟吉「独逸革命の回顧」『改造』5-5，1923年5月（pp. 11~38）
- 32 永井享「独逸社会民主党の産業及社会政策」『社会政策時報』34，1923年6月（pp. 1~19）
- 33 森戸辰男「ドイツ社会党合同問題と其背景」『大原社会問題研究所雑誌』1-1，1923年8月（pp. 141~187）
- 34 森戸辰男「ドイツ兩社会民主党合同前史」『大原社会問題研究所雑誌』2-1，1924年4月（pp. 237~366）
- 35 高橋貞樹「独逸社会主義の消長——全独逸労働者協会からゴータ大会まで」(1)(2)『マルクス主義』1-6，1924年10月

- (pp. 378~384). 2-1, 1925年1月 (pp. 28~43)
- 36 森戸辰男「ドイツ両社会党合同の経緯」『大原社会問題研究所雑誌』2-2, 1924年12月 (pp. 31~123)
 - 37 池田林義「ドイツ政治の枢軸としての中央党」『外交時報』482, 1925年1月 (pp. 64~94)
 - 38 森戸辰男「ドイツ社会党合同の完成」『大原社会問題研究所雑誌』3-1, 1925年1月 (pp. 73~121)
 - 39 稲垣守克「独逸共産党の政策」『社会政策時報』55, 1925年4月 (pp. 77~86)
 - 40 檜崎輝「独乙無産政党的の成立と其綱領」『社会思想』4-4, 1925年4月 (pp. 51~72)
 - 41 堀真琴「アウグスト・ベーベルと社会民主党前史」『我等』7-7, 1925年7月 (pp. 53~61) →VI-50
 - 42 村上保「独逸社会民主党小史」『マルクス主義』3-4, 1925年10月 (pp. 51~56)
 - 43 森戸辰男「最近ドイツ社会党史の一餉——ドイツ両社会民主党の合同」同人社, 1925年12月 (4, 9, 426p.)
 - 44 稲垣守克「独立社会民主党の外交政策」『法律及政治』〔明治大〕4-1, 1925年〔月記載なし〕(pp. 1~12)
 - 45 稲垣守克「独逸連立内閣と政党関係」『法律及政治』4-2, 1925年〔月記載なし〕(pp. 48~67)
 - 46 岩城忠一「独逸社会党内の諸分派」『商学論叢』1-3, 1926年*
 - 47 田中九一「インターナショナル統一問題と各国組合の態度」『改造』8-6, 1926年6月 (pp. 84~98)
 - 48 小泉信三「独逸社会思想」『近世社会思想史大要』岩波書店, 1926年11月 (pp. 219~281)
 - 49 河西太一郎「農業問題に於ける社会民主党と共産党」『社会科学』3-1, 1927年1月 (pp. 1~19)
 - 50 小泉信三「第2, 第3 インタナショナル(近世社会思想大略第22講)」『財政経済時報』14-1, 1927年1月 (pp. 7~13)
 - 51 河田嗣郎「独逸社会民主党の農政綱領」『経済論叢』25-3, 1927年9月 (pp. 60~90) →VI-13
 - 52 岡義武「環境に関連して見たる19世紀末独逸の民主主義運動」『国家学会雑誌』42-3, 1928年3月 (pp. 101~163)
 - 53 栗原藤七郎「独逸社会民主党と農業問題」『社会政策時報』93, 1928年6月 (pp. 62~74)
 - 54 山川均『インタナショナルの歴史』日本評論社(社会科学叢書20), 1929年4月 (2, 4, 172, 6 p.)
 - 55 井口孝親「独立社会党分裂の経緯とその意義——ドイツ無産政党史料」(1)~(4)『我等』11-4, 1929年4月 (pp. 46~54).
11-5, 1929年5月 (pp. 31~39). 11-6, 1929年6月 (pp. 39~53). 11-7, 1929年7月 (pp. 37~49)
 - 56 北吟吉「独逸革命と独逸社会党」『祖国』2-10, 1929年10月 (pp. 50~109)
 - 57 大内兵衛「ドイツ社会民主党の租税に関するテーゼ(1913年)」『大原社会問題研究所雑誌』7-1, 1930年3月 (pp. 274~292)
 - 58 吉川末次郎「第2 インターナショナルの植民政策」『国際知識』10-8, 1930年8月 (pp. 108~115)
 - 59 黒田礼二『廃帝前後——ポツダムからワイマアへ』中央公論社, 1931年1月 (2, 4, 649p.)
 - 60 向坂逸郎「独逸共産党と指導者テールマン」『改造』14-10, 1932年10月 (pp. 14~23)
 - 61 西本喬「独逸の政情を繞る左右両インタナショナルの統一問題」『社会政策時報』153, 1933年6月 (pp. 90~101)
 - 62 河合栄治郎「独逸社会民主党とマルキシズムの修正」1934年6月〔→I-32〕
 - 63 服部英太郎「独逸社会民主主義社会政策論の崩壊過程」『東北帝国大学法文学部10周年記念経済論集』岩波書店, 1934年9月* / 『ドイツ社会政策論史』上〔→V-77〕(pp. 11~263) / 『服部英太郎著作集』1〔→V-77〕(pp. 27~262)
 - 64 河合栄治郎「独逸社会民主党の成立——ゴータ合同の経緯」『経済学の諸問題』(河津教授還暦祝賀記念), 有斐閣, 1935年5月 (pp. 391~449) / 『河合栄治郎全集』9, 社会思想社, 1969年2月 (pp. 396~439)
 - 65 大内兵衛「ドイツ社会民主党の農業綱領について」1936年1月〔→II-137〕
 - 66 宇野弘蔵「社会党の関税論——1898年ドイツ社会民主党大会に於ける論議を中心として」1936年5月〔→II-138〕
 - 67 上田作之助「ドイツ共産党とその政策」『新社会』〔新社会社〕1-2, 1946年2月 (pp. 8~10)
 - 68 矢田俊隆「独逸社会民主党の没落の跡を辿る」『世界経済』〔世界経済調査会〕1-6, 1946年6月 (pp. 23~28)
 - 69 鮎沢岐「インターナショナルの過去と現在——物がたり」『世界の労働運動』(2)(3)上・下『労働評論』1-2, 1946年8月 (pp. 6~9). 1-3, 1946年9月 (pp. 38~43)
 - 70 鮎沢岐「革命主義か改良主義か——物がたり」『世界の労働運動』(7)(8)(9)上・中・下『労働評論』2-1, 1947年1月 (pp. 40~44). 2-2, 1947年2月 (pp. 22~27). 2-3, 1947年3月 (pp. 41~44)
 - 71 〔無署名〕「ドイツ諸政党の分析」『世界週報』〔時事通信社〕28-9, 1947年4月 (pp. 3~11)
 - 72 河合栄治郎『独逸社会民主党史研究』日本評論社, 1948年*
 - 73 小此木真三郎「ドイツ革命と社会民主党」『社会評論』〔ナウカ社〕5-8, 1948年11月 (pp. 49~65) / 『ファシズムの誕生』青木文庫, 1951年3月 (pp. 7~48)

- 74 岡義武『独逸デモクラシーの悲劇』弘文堂（アテネ文庫76），1949年10月（60p.）
- 75 小泉信三「エルフルト綱領の教訓——革命的理論と現実的实践」『文芸春秋』27-1，1949年1月（pp. 12~18）
- 76 猪木正道「ドイツ・マルクス主義の系譜」『共産主義の系譜』みすず書房，1949年5月（pp. 55~78）
- 77 服部英太郎『ドイツ社会政策論史——社会民主主義の崩壊とファシズムの抬頭』上，日本評論社，1949年7月*／『服部英太郎著作集』1（ドイツ社会政策論史 上），未来社，1967年9月（428，vi p.）
- 78 猪木正道「ドイツ共産党の悲劇——現代史への試み」『知性』〔国土社〕2-7，1949年7月（pp. 54~64）
- 79 向坂逸郎「エルフルト綱領研究」(1)~(3)『前進』24，1949年7月（pp. 17~21）. 25，1949年8月（pp. 92~98）. 26，1949年9月（pp. 82~88）
- 80 蠟山政道「『自由国家』と『社会革命』——ドイツ社会民主主義の歴史的課題」『改造』30-8，1949年8月（pp. 6~14）
- 81 猪木正道『ドイツ共産党史——西欧共産主義の運命』1950年1月〔→III-195〕
- 82 向坂逸郎「ある時代のドイツ社会民主党」『世界週報』31-1，1950年1月（pp. 51~53）
- 83 河合栄治郎『独逸社会民主党史論』（河合栄治郎選集10），日本評論社，1950年9月〔→I-32〕／『河合栄治郎全集』9，社会思想社，1969年2月（pp. 182~448）
- 84 菊池守「ドイツ共産党とドイツの警察隊」『世界週報』31-38，1950年9月（pp. 4~7）
- 85 吉村励「ドイツ労働運動史の一視角——猪木正道氏による歴史の歪曲」『経済学雑誌』〔大阪市立大〕24-4，1951年4月（pp. 89~118）
- 86 服部英太郎「ドイツ社会民主主義——西欧民主主義」『現代社会思想講座』2（西欧民主主義）春秋社，1951年5月（pp. 77~114）／「〔ドイツ社会民主主義の生成・発展と崩壊過程〕と改題のうえ」『服部英太郎著作集』5（国家独占資本主義社会政策論），未来社，1966年12月（pp. 148~188）
- 87 林健太郎「ドイツに於ける社会主義運動史研究の回顧——グスタフ・マイアーの業績に関連して」『史学雑誌』60-6，1951年6月（pp. 56~63）
- 88 吉村励「二つのドイツ社会民主党史」大阪市立大学経済研究所編『社会科学文献解説』8，日本評論社，1951年9月（pp. 99~114）
- 89 吉村励『ドイツ革命運動史——ワイマール体制下の階級闘争』青木文庫，1953年11月（198p.）
- 90 村瀬興雄『ドイツ現代史』東京大学出版会，1954年3月／第9版，1970年9月（4，369，70，13p.）
- 91 井藤半弥「ドイツ社会民主党の租税政策」『一橋論叢』31-4，1954年4月（pp. 1~33）
- 92 大河内一男『続社会思想史』有斐閣，1954年2月（1，2，266p.）
- 93 田中真晴「ウェーバーの政治的立場——ウェーバーと結集政策」出口勇蔵編『経済学説全集』6（歴史学派的批判的展開），河出書房，1956年1月（pp. 256~290）
- 94 篠原一『ドイツ革命史序説——革命におけるエリートと大衆』岩波書店，1956年10月（2，257，18p.）
- 95 猪木正道「ドイツ・オーストリアの社会党」民主社会主義連盟編『社会主義教科書』1，春秋社，1956年4月*
- 96 高橋正雄「『組織された資本主義』の理論」大河内一男・向坂逸郎・高島善哉・都留重人・名和統一編『社会主義講座』2（政治・経済学の世界主義），河出書房，1956年5月（pp. 150~173）
- 97 吉田震太郎「ドイツ社会民主党の財政政策論」鈴木武雄・武田隆夫編『経済学演習講座財政学』青林書院，1956年11月（pp. 184~189）
- 98 西岡幸泰「ドイツ社会民主党のビスマルク社会保険批判についての一考察」『経済学』〔東北大〕41，1956年12月（pp. 143~168）
- 99 猪木正道「社会民主主義の成立と発展——ドイツ・オーストリアを中心として」『講座 現代思想』4（新しい社会），岩波書店，1957年1月（pp. 149~172）
- 100 川合修治「社会主義と国民主義——第1次大戦勃発期におけるドイツ社会民主党の向背をめぐって」『文科報告』〔鹿児島大〕6，1957年8月（pp. 1~24）
- 101 大島通義「ドイツ社会民主党初期の財政論」『三田学会雑誌』50-4，1957年4月（pp. 67~81）
- 102 平実『社会政策的協同思想——ドイツ協同組合思想史』ミネルヴァ書房，1958年10月（9，3，306，7 p.）
- 103 林健太郎「ドイツ社会民主党史の教えるもの」『現代社会主義の再検討』中央公論社，1958年6月（pp. 51~73）
- 104 西尾孝明「ドイツ社会民主党に於ける組織論の陥穽」『政経論叢』〔明治大〕27-5，1958年12月（pp. 148~177）
- 105 中村菊男「ドイツにおける社会民主主義」『現代政治の実態』有信堂，1958年12月（pp. 29~41）
- 106 広田司郎「ドイツ社会民主党の財政政策」(1)~(7)『商学論集』〔関西大〕3-5，1958年12月（pp. 47~65）. 4-2，1956年6月（pp. 17~38）. 4-7・8，1960年3月（pp. 1~23）. 5-2，1960年6月（pp. 1~38）. 5-

- 4, 1960年10月 (pp. 19~40). 5・6・7, 1961年2月 (pp. 1~31). 6-1, 1961年4月 (pp. 24~56). /
『ドイツ社会民主党と財政政策』〔→V-123〕
- 107 西尾孝明「ドイツ社会民主党と自由労働組合——組織統合過程における改良主義の抬頭」『政経論叢』28-3, 1959年1月 (pp. 81~105)
- 108 細野武男「ドイツ中央党の性格と役割」『人文科学研究所紀要』〔立命館大〕6, 1959年3月 (pp. 18~72)
- 109 飯田鼎「ドイツ社会運動史にかんする最近の資料(その2)——社会主義鎮圧法の時期におけるドイツ社会民主党の闘争—帝国委員会の活動について」『三田学会雑誌』52-10, 1959年10月 (pp. 32~47)
- 110 飯田鼎「1905-1907年の第1次ロシア革命のドイツに及ぼした影響——ドイツ社会運動史にかんする最近の資料(3の1)」『三田学会雑誌』53-1, 1960年1月 (pp. 64~84)
- 111 飯田鼎「第1次ロシア革命(1905-1907年)のドイツに及ぼした影響——ドイツ社会運動史にかんする最近の資料(3の2)」『三田学会雑誌』53-2, 1960年2月 (pp. 59~76)
- 112 関嘉彦「ヨーロッパの社会主義運動の発展——ドイツ社会民主党を中心として」『日本労働協会雑誌』11, 1960年2月 (pp. 7~14, 31)
- 113 原田博「ドイツ社会民主党の農業理論——1894-95年の論争を中心にして」1960年3月〔→II-163〕
- 114 西尾孝明「ドイツ社会主義組織運動の挫折」『法学新報』〔中央大〕67-6, 1960年6月 (pp. 105~126)
- 115 飯田鼎「第1次世界大戦の勃発とドイツ社会民主党——ドイツ労働運動史にかんする最近の資料(4の1)」『三田学会雑誌』54-1, 1961年1月 (pp. 49~61)
- 116 田中重之「社会民主主義の諸課題——ドイツ社会民主党史素描」社会運動研究会, 1961年6月 (310p.)
- 117 飯田鼎「1890年から1914年にかけてのドイツ労働運動における若干の問題——W.バルテルの批判」『三田学会雑誌』54-7, 1961年7月 (pp. 25~43)
- 118 木下悦二「ドイツ社会民主党の関税論争」1961年8月〔→II-165〕
- 119 飯田鼎「第1次世界大戦中におけるドイツ社会民主党とプロレタリア国際主義——ドイツ社会運動史にかんする最近の資料(4の2)」『三田学会雑誌』54-10, 1961年10月 (pp. 42~56)
- 120 小林栄三郎「1870年代および80年代のドイツ労働運動の構造」上・中・下『史淵』〔九州大〕86, 1961年12月 (pp. 1~24) 88, 1962年7月 (pp. 1~29). 92, 1964年1月 (pp. 1~23)
- 121 村瀬興雄「民族問題と社会問題——オーストリア・ハンガリー帝国を中心に」『世界の歴史』15 (帝国主義), 筑摩書房, 1962年2月 (pp. 23~60)
- 122 喜安朗「第2インターナショナル——その現実認識の性格」『世界の歴史』15〔→V-121〕 (pp. 61~91) /『民衆運動と社会主義』〔→V-254〕 (pp. 94~136)
- 123 広田司朗「ドイツ社会民主党と財政政策」有斐閣, 1962年5月 (4, 4, 251p.) →V-106
- 124 正田庄次郎「1895-99年の国際情勢に対するドイツ社会民主党の認識——A.S.Jerussalimski, Die Außenpolitik und die Diplomatie des deutschen Imperialismus Ende des [19.] Jahrhunderts におけるドイツ社会民主党批判」『三田学会雑誌』55-9, 1962年9月 (pp. 60~72)
- 125 山崎怜「広田司朗『ドイツ社会民主党と財政政策』」『経済論叢』〔香川大〕35-4, 1962年10月 (pp. 103~117)
- 126 福田豊「改良主義は何故発生したか——ベルンシュタインと独社会民主党の道」1962年11月〔→I-49〕
- 127 諫山正「『経済民主主義』論の帰結——ドイツ労働運動敗退の教訓」1962年11月〔→I-49〕 (pp. 48~55)
- 128 中山崙雄「ドイツ関税政策と社会民主党」『経済学研究』〔九州大〕28-5, 1962年12月 (pp. 59~93)
- 129 猪木正道『社会思想入門』有紀書房, 1962年12月 (213p.)
- 130 西尾孝明「ドイツ社会民主党の組織問題——その保守化のメカニズム」『政経論叢』31-3, 1963年1月 (pp. 79~114)
- 131 矢田俊隆「オーストリア社会民主党と民族問題」『スラウ研究』〔北海道大〕7, 1963年3月 (pp. 15~56)
- 132 松田秀人「スバルタクス派のプロレタリア党組織論——ローザ・ルクセンブルグの理論を中心として」1963年3月〔→III-228〕
- 133 浅井啓吾「ドイツ社会民主党史研究序説——世紀転換期における正統主義と修正主義をめぐって」上・下, 1963年7月, 1964年3月〔→I-50〕
- 134 篠筈憲爾「ビューロ・ブロック」の解体とドイツ社会民主党『商学論集』〔福島大〕32-3, 1963年12月 (pp. 90~146)
- 135 戸田三三冬「オーストリア革命の諸前提をめぐって——ドイツ・オーストリア社会民主党を中心に」『史艸』〔日本女子大〕5, 1964年 (pp. 79~105)*
- 136 村瀬興雄「ドイツ社会民主主義の『転換』——ナチス治下の社会民主党」『思想』481, 1964年7月 (pp. 32~48)

- 137 川井修治「ドイツ革命の見方について——社会民主党を中心に」『鹿児島大学史学科報告』13, 1964年9月(pp. 69~81)
- 138 飯田収治・中村幹雄・野田宣雄・望田幸男「ドイツ政党組織の史的考察」上・下『史林』〔京都大〕47-5, 1964年9月(pp. 90~116). 47-6, 1964年11月(pp. 107~132)
- 139 浅井啓吾「ドイツ社会民主党の国家論」1964年10月〔→II-170〕
- 140 飯田収治「ドイツ社会民主党の帝国議会対策——1871-1890年の時期を中心に」『西洋史学』64, 1965年1月(pp. 47~66)
- 141 上杉重二郎「1946年4月, 東部ドイツにおけるドイツ共産党とドイツ社会民主党との合同について」『立教経済学研究』18-4, 1965年2月(pp. 251~275)
- 142 村瀬興雄「ヨーロッパの社会主義像——カウツキー・パウアー・第2インターナショナル」1965年3月〔→II-172, VI-16〕
- 143 山口和男「ドイツ社会民主党の農業論争——19世紀末ドイツ社会主義の思想的性格検出のための一論」『思想』490, 1965年4月(pp. 13~27)／「農業綱領をめぐる論争——党内諸思想の交錯と対立」と改題のうえ」『ドイツ社会思想史研究』〔→V-228〕(pp. 31~65)
- 144 西尾孝明「ドイツ社会民主党の党大会——その保守化のメカニズム」『明治大学政治経済学部創立60周年記念論文集』(『政経論叢』33-3・4・5・6) 1965年5月(pp. 76~98)
- 145 篠塚敏生「1919年1月闘争後の革命的オプロイテ」『西洋史学論集』〔九州大〕14, 1965年12月(pp. 47~61)
- 146 松田秀人「東独におけるスバルタクス派評価の方法——『ドイツ労働運動史綱要』の方法を手がかりとして」1965年8月〔→III-239〕
- 147 花見忠「労働組合の政治的役割 ドイツにおける経験」未来社, 1965年9月(485p.)
- 148 塚本健「ドイツ社会民主党と国有化問題」『唯物史観』1, 1965年10月(pp. 135~148)
- 149 山口和男「ドイツ社会民主党急進派の革命思想——バルヴスの場合」『思想』497, 1965年11月(pp. 44~57)→VI-252／「革命像の模索——急進派バルヴスの登場」と改題・補訂のうえ」『ドイツ社会思想史研究』〔→V-228〕(pp. 67~98)
- 150 孝橋正一「ドイツ社会民主主義と修正主義」「国際労働運動」『社会主義——思想と運動』ミネルヴァ書房(社会科学選書43), 1966年1月(pp. 139~179)
- 151 西川正雄「第1次世界大戦前のドイツ社会民主党——修正主義の諸問題」『現代史研究』16, 1966年3月(pp. 134~144)
- 152 平井友義「ヒトラーの権力掌握の一断面——コミンテルンとKPD」『ロシア史研究』14, 1966年5月(pp. 16~29)
- 153 浅井啓吾「第1次ロシア革命とドイツ社会民主党——正統派と修正派のロシア革命論」1966年6月〔→I-58〕
- 154 飯田収治・中村幹雄・野田宣雄・望田幸雄「ドイツ現代政治史——名望家政治から大衆民主主義へ」ミネルヴァ書房(社会科学選書46), 1966年7月(8, 335, 5 p.)
- 155 阪上孝「ドイツ革命と社会化論争——ドイツ社会民主党と社会化の挫折(1)」『経済論叢』98-1, 1966年7月(pp. 30~46)
- 156 西尾孝明「ドイツ社会民主党の機関紙活動(1)——1864~1890年, (2)——1890~1913年」『政経論叢』34-6, 1966年7月(pp. 45~66). 35-2, 1966年12月(pp. 37~69)
- 157 阪上孝「社会化の挫折とその思想的根拠——ドイツ社会民主党と社会化の挫折(2)」『経済論叢』98-2, 1966年8月(pp. 37~54)
- 158 西尾孝明「全ドイツ労働者協会の結成」『法学新報』〔中央大〕73-9, 1966年9月(pp. 23~58)
- 159 西川正雄「ドイツ第2帝制における社会民主党——『修正主義論争』の背景」1966年9月〔→I-59〕
- 160 伊藤定良「ドイツ社会民主党と大衆ストライキ論争」『現代史研究』17, 1966年11月*
- 161 井代彬雄「ヴァイマル共和制期のドイツ共産党に関する一考察」『歴史研究』〔大阪学芸大〕4, 1966年11月(pp. 83~105)
- 162 〔無署名〕「『インターナツィオナーレ』誌の成立前後——スバルタクス・ブントの歴史のために」1966年(月記載なし)〔→III-98, 253〕(付録 pp. 1~16)
- 163 篠塚敏生「革命的オプロイテとスバルタクスブント——1918年12月末の両者の統一交渉について」『西洋史学論集』16, 1967年2月(pp. 27~35)
- 164 飯田収治「ドイツ社会民主党史研究の一動向——『ヴィルヘルム2世の時代』と世界政策の問題」『西洋史学』73, 1967年4月(pp. 56~68)
- 165 山口定「秘密再軍備とドイツ社会民主党——ワイマル体制崩壊原因論の一視角」(1)~(4)『立命館法学』71, 1967年6

- 月 (pp. 1~36). 72, 1967年8月 (pp. 27~57). 73, 1968年1月 (pp. 36~66). 75・76, 1968年3月 (pp. 39~64)
- 166 山口和男「バルグスのロシア革命論——ドイツ社会民主党急進派の革命思想」『思想』520, 1967年10月 (pp. 83~97)
→VI-254/「世界革命の構想とロシア」と改題のうえ」『ドイツ社会思想史研究』〔→V-228〕 (pp. 99~126)
 - 167 西村三郎「ドイツ社会民主党と国防問題」(1) (2)『山口大学教養部紀要』1, 1967年12月 (pp. 19~32). 2, 1968年10月 (pp. 19~32)
 - 168 西尾孝明「ドイツ社会民主労働者党成立史」『政経論叢』36-2, 1968年1月 (pp. 1~29)
 - 169 浅井啓吾「ドイツ (1918-20年) における社会化の動向と挫折の思想的背景——ドイツ社会民主党の社会化政策にあられた国家認識の問題性」『経済系』76, 1968年3月 (pp. 56~68)
 - 170 篠塚敏生「ドイツ社会民主党とドイツ革命の勃発——シャイデマンの共和国宣言の意味するもの」『西洋史学論集』17, 1970年12月 (pp. 17~43)
 - 171 垂水節子「ドイツ社会民主党と植民地問題——1907年選挙の問題点」『現代史研究』21, 1968年4月 (pp. 13~26)
 - 172 保住敏彦「ドイツ社会民主党と関税問題——とくにヒルファディングの保護関税論を中心として」1968年7月〔→IV-143〕
 - 173 鼓肇雄「マックス・ヴェーバーとドイツ労働問題」『資本主義の思想構造』1968年8月〔→III-263〕 (pp. 409~429) /
「マックス・ヴェーバーと労働問題」御茶の水書房, 1971年6月 (pp. 3~90)
 - 174 山本佐門「ドイツ社会民主党リーダーの状況認識と戦術——カール・カウツキーの場合 (その1) 1890年~1900年」(1) (2) 1968年11月, 1969年3月〔→II-184〕
 - 175 西川正雄「ドイツ社会民主主義」水田洋編『社会思想史』有斐閣, 1968年12月 (pp. 157~176)
 - 176 須藤博忠「ドイツ社会主義運動史」日刊労働通信社, 1968年12月 (1018p.)
 - 177 篠塚敏生「ドイツ社会民主党と1917年『7月危機』——第1次大戦中のドイツ社会民主党の行動様式の研究」『西洋史学』80, 1969年1月 (pp. 18~36)
 - 178 三宅立「ビューロー=カウツキー的情况成立の歴史的諸前提」1969年3月〔→II-186〕
 - 179 柏崎千枝子「ポーランドにおける『1905年革命』の展開とポーランド=リトヴァ社会民主党」1969年4月〔→III-267〕
 - 180 上林貞治郎「ドイツ社会主義の成立過程——ドイツ民主共和国の創立」ミネルヴァ書房, 1969年6月 (6, 346p.)
 - 181 篠塚敏生「ドイツ社会民主党と1917年1月ストライキ——第1次大戦期のドイツ社会民主党の行動様式の研究」『歴史学研究』353, 1969年10月 (pp. 14~31)
 - 182 山口定「ワイマル共和国後半期におけるドイツ社会民主党内の国防論争」『立命館法学』81・82, 1969年11月 (pp. 32~83)
 - 183 上杉重二郎『ドイツ革命運動史』全2冊, 青木書店, (上) 1969年11月 (369p.). (下) 1969年12月 (428p.)
 - 184 西川正雄「第1次大戦前夜の社会主義者たち」『講座 世界歴史』23 (近代10), 岩波書店, 1969年12月 (pp. 261~294)
 - 185 内田忠男「ドイツ社会民主党」『講座 マルクス主義』3 (マルクス主義思想史), 日本評論社, 1970年1月 (pp. 49~110)
 - 186 島崎晴哉「アイゼナッハ派創立100年——政党と組合の関連の問題によせて」労働運動史研究会編『国際労働運動の歴史と現状』(労働運動史研究51), 1970年1月 (pp. 189~208)
 - 187 高倉英二『社会民主主義の百年. ドイツ社民党の歩み』日刊労働通信社, 1970年4月 (170p.)
 - 188 富永幸生「ドイツ共産党創立大会——『大会議事録』を中心に」1970年6月〔→III-273〕
 - 189 垂水節子「ドイツ社会民主党と帝国主義時代の政治——1907年帝国議会選挙を中心に」『お茶の水史学』13, 1970年9月 (pp. 59~79)
 - 190 星野中「帝国主義と資本制生産の歴史性(1)——ドイツ社会民主党における帝国主義認識の一側面」1970年10月〔→III-276〕
 - 191 木村靖二「ドイツ連邦共和国における最近の共産党史研究と史料状況」『史学雑誌』79-11, 1970年11月 (pp. 68~79)
 - 192 山本佐門「修正主義論争以後のドイツ社会民主党リーダーの政治指導路線——カール・カウツキーを中心として」(1) (2) 1970年12月, 1971年3月〔→II-190〕
 - 193 山口和男「労働運動国際歴史家会議に出席して」『思想』559, 1971年1月 (pp. 134~140)
 - 194 水田洋『マルクス主義入門』社会思想社, 1971年2月 (246p.) / 初版: 1966年2月 (240, 9p.)
 - 195 伊藤セツ「ドイツ社会民主主義の発展過程における婦人問題にかんする理論と政策の展開——初期から1888年まで」『北星学園女子短期大学紀要』17, 1971年4月 (pp. 37~66) →VI-277
 - 196 伊藤定良「1910年におけるドイツ社会民主党の党内抗争」1971年4月〔→I-66〕

- 197 高田紀夫「J.P.ネットのドイツ社会民主党論(1890～1914)」『経済学雑誌』64-5, 1971年5月(pp. 23～40)
- 198 垂水節子「ドイツ社会民主党の帝国主義に対する認識の特徴——1900-12年党大会を中心に」『史観』〔早稲田大〕84, 1971年11月(pp. 70～83)
- 199 西川正雄「歴史学とマルクス主義(3)——ドイツ社会民主党とマルクス主義史学についての断章」『講座 世界歴史』30(別巻), 1971年11月(pp. 272～289)
- 200 塩崎弘明「ライヒス・コンコルダートの成立と中央党の解散」『現代史研究』26, 1971年12月(pp. 16～33)
- 201 東中野修「ドイツ社会民主党と修正主義論争——改革と革命の問題」1971年12月〔→I-67〕
- 202 西川正雄「第2 インターナショナルと植民地問題」『歴史学研究』381, 1972年2月(pp. 9～27)
- 203 山本佐門「第1次大戦下におけるドイツ社会民主党左派, カール・リープクネヒト——その思想と行動」『北大法学論集』22-4, 1972年2月(pp. 1～64)→VI-199/「ドイツ社会民主党とカウツキー」〔→V-298〕(pp. 211～277)
- 204 木全清博「相対的安定期のドイツ共産党の動向——H. ヴェーバーの紹介をつうじて」『歴史研究』〔愛知教育大・教育学会〕19, 1972年3月(pp. 108～120)
- 205 飯田収治「第1次世界大戦前夜のドイツの国内政治」『群馬大学教育学部紀要』〔人文・社会科学編〕21, 1972年3月(pp. 181～198)
- 206 飯田鼎「ヨーロッパ労働運動史の研究状況——オーストリア国リンツにおける国際労働運動歴史家会議第7回大会に出席して」『三田学会雑誌』65-2・3, 1972年3月(pp. 110～117)
- 207 豊永泰子「ドイツ社会民主党と農業綱領問題」『ドイツ資本主義の史的構造』1972年3月〔→IV-175〕(pp. 329～351)
- 208 原田博「ドイツ社会民主党とキール農業綱領」1972年3月〔→II-196〕
- 209 大野節夫「ドイツ社会民主党の帝国主義論の諸特徴——平和的帝国主義論と帝国主義的経済主義」1972年5月〔→II-197〕
- 210 中村貞二「マックス・ヴェーバー研究——ドイツ社会政策思想史考」未来社, 1972年6月(444, vip.)
- 211 吉村忠穂「ドイツ共産党の成立に関する一考察1918-1920年」『史学雑誌』81-8, 1972年8月(pp. 61～82)
- 212 浅井啓吾「アムステルダム社会史国際研究所とドイツ社会民主党文庫」『経済系』93, 1972年9月(pp. 110～119)
- 213 飯田収治「『城内平和 Burgfriede』への道——1905-14年, 戦争・帝国政府・ドイツ社会民主党」『人文研究』〔大阪市立大〕24-10, 1972年12月(pp. 1～36)
- 214 河西勝「ドイツ社会民主党の『農業論争』に関する若干の考察」『経済学研究』〔北海道大〕23-1, 1973年3月(pp. 41～77)
- 215 市原健志「崩壊論争史——『恐慌と崩壊』, 19世紀末におけるドイツ社会民主党の『崩壊論争』を中心として」1973年3月〔→III-301〕
- 216 西川正雄「第2 インターナショナルと帝国主義——第8回リンツ会議に出席して」『思想』585, 1973年3月(pp. 127～144)〔リンツ会議の報告には, 193, 206のほか『経済学史学会年報』9(山口和男), 10(飯田鼎), 12(水田洋), 14(山口和男), 15(内田忠男), 『思想』608(鹿毛達雄), 『歴史評論』334(西川正雄), 『歴史学研究』472(塚本健), 483(芝健介), 495(伊藤成彦・山口定)がある。〕
- 217 田村信一「ドイツ革命における『社会化』の特質」『経済学年誌』〔法政大・大学院〕10, 1973年3月(pp. 1～21)
- 218 伊藤セツ「ドイツ社会民主党の婦人政策——1889-1913年」吉武清彦編『社会政策学の現代的課題』北海道大学図書刊行会, 1973年4月(pp. 73～104)→VI-278
- 219 田中良明「ドイツ社会民主党左派の帝国主義認識の前提——世紀転換期までのバルブスの資本主義=革命認識」『経済学雑誌』68-4, 1973年4月(pp. 34～50)→VI-259
- 220 影山日出弥「『労働者政府』の理論と経験」『国家イデオロギー論』青木書店, 1973年5月(pp. 209～243)
- 221 中島博「ドイツ共産党の農業政策——KPD初期の農業綱領を中心にして」『現代史研究』27, 1973年8月(pp. 78～96)
- 222 矢田俊隆「オーストリア社会民主党の民族理論」『季刊 社会思想』3-2, 1973年8月(pp. 21～33)→VI-22
- 223 安世舟「ドイツ社会民主党史序説——創立からワイマール共和国成立期まで」御茶の水書房, 1973年8月(10, 4, 354, 17p.)
- 224 松岡利道「最近のドイツ共産党研究」『歴史学研究』401, 1973年10月(pp. 35～44)
- 225 酒井晨史「ドイツの革命運動と社会主義」『歴史学研究』404, 1974年1月(pp. 47～51, 63)
- 226 山田義顕「ドイツ社会民主党と植民地問題」『待兼山論集』〔史学篇・大阪大〕7, 1974年1月(pp. 1～22)
- 227 酒井晨史「第1次世界大戦におけるオーストリア社会民主党」『人文論集』〔早稲田大〕11, 1974年2月(pp. 1～20)
- 228 山口和男「ドイツ社会思想史研究——プロイセン・ドイツ国家における社会思想の諸形態」ミネルヴァ書房, 1974年

2月(10, 238, 3 p.) → V-143, 149, 166, VI-253, 256, 260

- 229 服部英太郎『ドイツ社会運動史』(服部英太郎著作集7), 未来社, 1974年3月(339p.)
- 230 木全清博「ドイツ共産党(KPD)のプロレタリア統一戦線運動——1921年～23年のKPD史の理解のために」『歴史研究』[大阪教育大] 11, 1974年3月(pp. 43～72)
- 231 吉村忠穂「ヴァイマル共和国の末期におけるドイツ共産党の革命路線について」『上智史学』19, 1974年10月(pp. 94～103)
- 232 西川正雄「社会主義・民族・代表権——第2インターナショナルの経験」『思想』606, 1974年12月(pp. 20～41)
- 233 篠塚敏生「ドイツ社会民主党とドイツ革命——『エーベルト・グレーナー同盟』の成立と展開」『史学雑誌』83-12, 1974年12月(pp. 1～39)
- 234 木谷勤「ドイツ第二帝制の歴史的 성격の把握をめぐる諸問題——学説史的再検討」『大阪教育大学紀要』23-II, 1975年1月(pp. 73～88)／『ドイツ第二帝制史研究』[→V-250](pp. 3～29)
- 235 中林賢二郎「第2半インタナショナルの『政綱』と『決議』」『資料室報』[大原社研]211, 1975年2月(pp. 1～10)／『統一戦線史序説』[→V-244](pp. 119～133)
- 236 室潔「宗教政党と政治改革——ヴィルヘルム時代における中央党左派の動向をめぐって」『西洋史学』96, 1975年3月(pp. 25～43)／『宗教政党と政治改革』[→V-255](pp. 23～62)
- 237 中林賢二郎「第2半インタナショナルの指導理論とその組織成立の過程」『社会労働研究』[法政大]21-3・4, 1975年3月(pp. 169～201)／『統一戦線史序説』[→V-244](pp. 87～119)
- 238 菊川清美「ヴァイマル共和国初期労働者政府運動の一考察」『歴史評論』300, 1975年4月(pp. 231～251)
- 239 山本統敏編・解説『第2インターの革命論争』(マルクス主義革命論史2), 紀伊国屋書店, 1975年5月(3, 6, 512 p.) → I-8
- 240 保住敏彦「第2インターナショナルの植民政策論争とカウツキーの帝国主義認識」1975年8月[→II-209]
- 241 伊藤定良「安世舟『ドイツ社会民主党史序説』——創立からワイマル共和国成立期まで」『歴史学研究』424, 1975年9月(pp. 62～64)
- 242 松岡利道「帝国主義論の学説史的研究——ドイツ社会民主党を中心に」1975年11月[→I-75]
- 243 中林賢二郎「第2インタナショナルの再建と3つのインタナショナルのベルリン協議会」『社会労働研究』22-3・4, 1976年3月(pp. 1～61)／『統一戦線史序説』[→V-244](pp. 135～196)
- 244 中林賢二郎『統一戦線史序説 1914-1923——インタナショナルにおける統一と分裂の論理』大月書店, 1976年5月(254, 8p.) → V-235, 237, 243
- 245 市原健志「SPDの資本主義の発展段階認識と対外政策——19世紀末「修正主義論争」の帝国主義論史上における意義についての一考察」1976年5月[→I-76]
- 246 倉田稔「ドイツ社会民主党とストライキ論争——ヒルファディングとローザ」1976年6月[→III-327]
- 247 西田彰「ドイツ共産党のボルシェヴィキ化」『関西西洋史論集』6, 1976年12月(pp. 139～148)*
- 248 淡路憲治「エンゲルスとドイツ社会民主党——『フランスとドイツにおける農民問題』を中心として」(1)～(3)『現代の理論』155, 1976年12月(pp. 65～85). 157, 1977年2月(pp. 83～107). 161, 1977年6月(pp. 117～140) → VI-132／『西欧革命とマルクス, エンゲルス』未来社, 1981年10月(pp. 143～234) → VI-129, 132
- 249 島崎晴哉「『ゴータ合同』における婦人選挙権問題」『経済学論纂』[中央大] 18-1, 1977年1月(pp. 81～98)
- 250 木谷勤『ドイツ第二帝制史研究——「上からの革命」から帝国主義へ』青木書店, 1977年3月(ix, 326, xxii p.) → V-234
- 251 南塚信吾「ハンガリー社会民主党と農業問題——1890年代の『農業社会主義』をめぐって」『歴史学研究』444, 1977年5月(pp. 1～15)
- 252 山田徹「ドイツ共産党の統一戦線運動の構造——1921年後半から1922年を中心として」(1)～(3)『神奈川法学』12-2・3, 1977年7月(pp. 127～170). 13-3, 1978年6月(pp. 49～82). 14-2・3, 1979年7月(pp. 21～56)
- 253 坪郷実「経営レーテ運動の基礎——第1次世界大戦と大衆内活動家層の形成」(1)～(4)1977年7月～1978年9月[→III-332]
- 254 喜安朗『民衆運動と社会主義——ヨーロッパ現代史研究への一視角』勁草書房, 1977年9月(254p.) → V-122
- 255 室潔「宗教政党と政治改革——新たなドイツ現代史像の素描」早稲田大学出版部, 1977年10月(vi, 251, 10p.) → V-236
- 256 西川正雄「第2インターナショナル史の旅とヨーロッパの文書館・図書館」『社会思想史研究』1, ミネルヴァ書房,

1977年12月 (pp. 206~217)

- 257 斎藤哲「カール＝ラーデクとドイツ共産党——KPD創立からベルリン1月闘争へ」『明治大学大学院紀要』(政治経済学篇) 15, 1977年12月 (pp. 47~59)
- 258 五十嵐仁「コミンテルン初期における統一戦線政策の形成——特にドイツ共産党との関係を中心に」『社会労働研究』24-1・2, 1978年2月 (pp. 121~190)
- 259 上杉重二郎「1921年3月行動におけるドイツ共産党の戦術に対する批判および反批判」『北海道大学教育学部紀要』31, 1978年3月 (pp. 1~40)
- 260 垂水節子「ドイツ革命期の青年——ブラウنشヴェイクでのインタビューを中心に」『お茶の水史学』21, 1978年3月 (pp. 50~63)
- 261 加藤一夫「ポーランド王国社会民主党の形成」『西洋史学』108, 1978年3月 (pp. 31~44)
- 262 山辺知紀訳・解説「最近の欧米におけるUSPD研究の紹介とUSPD研究の問題点——Hartfrid Krause “USPD” (1)」『金沢大学経済論集』15, 1978年3月 (pp. 91~136) →V-278
- 263 上杉重二郎「統一戦線と労働者政府——カップ叛乱の研究」風間書房, 1978年3月 (9, 802, 36p.)
- 264 富永幸生・鹿毛達雄・下村由一・西川正雄『ファシズムとコミンテルン』東京大学出版会, 1978年6月 (xi, 359, 45p.)
- 265 伊藤定良「第2インタナショナルと国家問題——第1次世界大戦前におけるカール・カウツキーとドイツ社会民主党を中心に」1978年6月 [→II-224]
- 266 山本佐門「ワイマール共和国の崩壊と社会民主主義者の反省——ユリウス・レーバーの場合」『釧路論集』[北海道教育大学釧路分校研究紀要] 10, 1978年* / 「ドイツ社会民主党とカウツキー」 [→V-298] (pp. 336~360)
- 267 田中優「ドイツ第二帝政下における社会民主党の一断面——議会主義・革命」『史学研究』[広島大] 140, 1978年7月 (pp. 47~67)
- 268 松葉正文「ドイツ社会民主主義者の社会化構想——現代危機におけるヤヌス」1978年7月 [→IV-258]
- 269 田村信一「『相対的安定期』におけるドイツ社会民主党の経済政策の特質——『組織資本主義』と『冷たい社会化』問題を中心にして」(1) (2)『立教経済学研究』32-1, 1978年7月 (pp. 183~200). 32-2, 1978年10月 (pp. 113~137)
- 270 中山雄雄「ドイツ帝国主義の成立と関税論争」熊本商科大学海外事情研究所(研究叢書3), 1978年9月 (132, 9p.)
- 271 後藤洋「いわゆる『アイゼナハ派』の成立をめぐる——マルクス主義の普及過程の一断面」『社会科学雑誌』[鹿児島大] 1, 1978年10月 (pp. 115~131)
- 272 山本佐門「ワイマール共和国末期のドイツ社会民主党指導路線の基本的性格——1932年選挙闘争を中心に」『北海道教育大学紀要』[社会科学編] 29-1, 1978年9月 (pp. 1~15) / 「ドイツ社会民主党とカウツキー」 [→V-298] (pp. 306~335)
- 273 神代光朗「ドイツ社会民主党のポーランド論争(1897年~1913年)におけるローザ・ルクセンブルクの立場」1978年10月 [→III-338]
- 274 斎藤哲「パウル＝レーヴィ指導下のドイツ共産党」『西洋史学』110, 1978年11月 (pp. 19~37)
- 275 宮本光雄「ドイツ共産党の創立——『独自の党』結成をめぐる」『現代史研究』29, 1979年1月 (pp. 1~42)
- 276 市原健志「ドイツ社会民主党(SPD)内の政治的大衆ストライキ論」(1)(2)1979年1月, 3月 [→II-226, 227]
- 277 石川捷治「1932年の反ナチ統一戦線問題——ドイツ共産党の動向を中心として」『法政研究』[九州大] 45-2, 1979年2月 (pp. 65~101)
- 278 山辺知紀「ドイツ独立社会民主党の成立——Hartfrid Krause, USPD, (2)」『金沢大学経済論集』16, 1979年3月 (pp. 107~159) →V-262
- 279 乗杉澄夫「ヴィルヘルム帝政下のドイツ社会民主党における組織至上主義と待機主義の生成——1890年代を中心に」『経済学』[東北大] 40-4, 1979年3月 (pp. 79~102)
- 280 斎藤哲「コミンテルン第3回大会とドイツ共産党」『政経論叢』[明治大] 47-5・6, 1979年3月 (pp. 179~217)
- 281 平瀬徹也「シャルル・アンドレールのドイツ社会民主党批判——ジョレス・アンドレール論争の紹介」『史論』[東京女子大] 32, 1979年3月 (pp. 1~11)
- 282 垂水節子「第1次大戦下のドイツにおける反戦運動——ブラウنشヴェイクの場合」『史学雑誌』88-3, 1979年3月 (pp. 52~79)
- 283 亀嶋庸一「ウェーバーのドイツ社会民主党観に関する一考察——R.ブランク論文への『覚書』をめぐる」『成蹊法学』14, 1979年4月 (pp. 267~304)
- 284 小淵港「ドイツ社会民主主義の行財政改革論をめぐる」『財政学研究』2, 1979年6月 (pp. 16~*)

- 285 石川捷治「コミンテルン初期のファシズム認識——ドイツ共産党の分析との関連を中心に」『法政研究』46-1, 1979年10月 (pp. 35~77)
- 286 松俊夫「カップー揆とドイツ民主党〔DDP〕」『成城文芸』90, 1979年11月 (pp. 1~29)
- 287 関口宏道「エルケレンツとドイツ民主党」『西洋史学』114, 1979年12月 (pp. 22~42)
- 288 斎藤哲「ドイツ共産党の労働組合政策——VKPD創立大会とイエナ党大会を中心に」『政経論叢』48-3・4, 1979年12月 (pp. 71~110)
- 289 倉田稔「社会民主党共同行動団の成立」『商学討究』〔小樽商科大〕30-3, 1980年1月 (pp. 15~35)
- 290 篠塚敏生「カップー揆とドイツ共産党」『熊本大学教養部紀要』〔人文・社会科学編〕15, 1980年2月 (pp. 47~66)
- 291 飯田収治「ドイツ社会民主党——1890~1914年の時期を中心にして」野田宣雄編『19世紀のヨーロッパ』(西洋史9), 有斐閣新書, 1980年3月 (pp. 167~202)
- 292 西川正雄「ドイツ社会民主党史——文献目録(講義資料)」『歴史と文化』〔東大教養学部人文科学科紀要70〕, 1980年3月 (pp. 43~78)
- 293 篠塚敏生「カップー揆とドイツ社会民主党」『西洋史学』116, 1980年3月 (pp. 1~20)
- 294 下村由一「反ファシズム運動とドイツ共産党」『ファシズム期の国家と社会』8(運動と抵抗 下), 東京大学出版会, 1980年3月 (pp. 5~33)
- 295 北村喜義「『社会主義とナショナリズム』平易な解説——SPDと戦争:USPDと第3インター」(1)~(3)『六甲台論集』〔神戸大・大学院〕27-2, 1980年7月 (pp. 80~92). 28-1, 1981年4月 (pp. 164~177). 28-2, 1981年7月 (pp. 50~73)
- 296 後藤洋「『アイゼナッハ派』のシュトゥットガルト大会とバーゼル決議」『社会科学雑誌』〔鹿児島大〕3, 1980年9月 (pp. 1~26)
- 297 乗杉澄夫「ドイツ社会民主党のプロイセン邦議会選挙参加と初期大衆ストライキ論争1893年-1904年——プロイセン邦議会選挙権闘争と大衆ストライキ論争の前史」『経済理論』〔和歌山大〕179, 1981年1月 (pp. 26~59)
- 298 山本佐門「ドイツ社会民主党とカウツキー」北海道大学図書刊行会, 1981年1月 (viii, 360, 27p.) →V-203, 266, 272, VI-127
- 299 石川捷治「ドイツ共産主義運動の〈個性〉—— Kommunismusと『国民的伝統』へのアプローチ」『法政研究』47-2・3・4, 1981年3月 (pp. 311~340)
- 300 島崎晴哉「資料 1868年9月26日からベルリンで開催される『全ドイツ労働者大会』のための諸提案」(1)(2)『経済学論纂』22-2, 1981年3月 (pp. 97~108). 22-3, 1981年5月 (pp. 33~47)
- 301 星乃治彦「ヴァイマル共和制末期における反ファッショ運動の諸相——ドイツ共産党の『人民革命』構想をめぐって」『歴史評論』374, 1981年6月 (pp. 97~115, 28)
- 302 高屋正一「ドイツ人民戦線運動とドイツ共産党——反ファシズム運動の模索」『大学院紀要』〔法政大〕7, 1981年10月 (pp. 169~182)
- 303 福岡利裕「ドイツ社会民主党における修正主義論争」1981年11月〔→I-85〕
- 304 斎藤哲「『社会ファシズム論』とその修正——1929年半ばから30年半ばのKPD」(1)(2)『政経論叢』50-2, 1981年11月 (pp. 103~136). 50-3・4, 1982年3月 (pp. 175~220)
- 305 黒滝正昭「現代ドイツ社会思想史の課題に関する一考察」1982年1月〔→IV-301〕
- 306 酒井晨史「1918年11月革命におけるオーストリア社会民主党の役割」『人文論集』〔早稲田大〕19, 1982年2月 (pp. 15~45)
- 307 斎藤哲「義和団事件当時のヨーロッパ社会主義」『史潮』〔歴史学会〕11, 1982年8月 (pp. 75~97, 118)
- 308 乗杉澄夫「ドイツ社会民主党の大衆ストライキ論争と選挙権闘争1905/06年」(1)『経済理論』189, 1982年9月 (pp. 47~88)

VI 個人別邦語文献目録

a バウアー (Otto Bauer, 1881~1938)

Marx' Theorie der Wirtschaftskrisen, NZ, 23. Jg., 1. Bd., 1904, Nr. 5, S. 133-38, Nr. 6, S. 164-70.

- 1 松井隆一訳「マルクスの経済恐慌理論」『マルクス恐慌理論』叢文閣, 1931年6月 (pp. 89~116)
- 2 松崎敏太郎訳「マルクスの経済恐慌理論」『恐慌論』叢文閣, 1935年11月 (pp. 89~116)

- Die Nationalitätenfrage und die Sozialdemokratie, *Marx-Studien*, Bd. 2, Wien 1907. 2. Aufl, Wien 1924.
- 3 倉田稔抄訳「オットー・バウアーの帝国主義論」『社会事業の諸問題』〔日本社会事業大学研究紀要〕21, 1973年12月 (pp. 83~100)

- Das Finanzkapital, *Der Kampf*, 3. Jg., 1909-10, Heft 9, S. 391-97.
- 4 八木沢善次訳「金融資本の成立——ヒルファードィング著『金融資本論』評」『社会思想』3-5, 1924年7月 (pp. 34~44)
- 5 赤松五百麿訳「社会主義経済論の一発展(ヒルファードィングの金融資本論)」『我等』6-6, 1924年7月 (pp. 74~88)

- Goldproduktion und Teuerung, *NZ*, 30. Jg., 2. Bd., 1911-12, Nr. 27, S. 4-14, Nr. 28, S. 49-53.
- 6 笠信太郎訳「金生産と物価騰貴」『金と物価——一貨幣価値論争』同人社(我等叢書別冊2), 1927年8月 (pp. 123~161)

- Die Akkumulation des Kapitals, *NZ*, 31. Jg., 1. Bd., 1912-13, Nr. 23, S. 831-38, Nr. 24, S. 862-74.
- 7 向坂逸郎訳「資本の蓄積と帝国主義」『社会科学』〔改造社〕3-2, 1927年4月 (pp. 76~97)／『資本の蓄積と帝国主義』叢文閣, 1928年5月 (pp. 1~46) →VI-243

- Der Weg zum Sozialismus*, Wien 1919. 12. Aufl., 1921.
- 8 日高明三訳『社会主義への道——社会化の実践』アカギ書房, 1946年 月 (61p.)*

- Anon. Austromarxismus, *Arbeiter-Zeitung*, 3. Nov. 1927.
- 9 田川恒夫訳「アウストロ・マルクス主義について」『季刊 社会思想』3-2, 1973年8月 (pp. 206~209)

- Der Kampf um die Staatsmacht, in Otto Jenssen, *Der Kampf um die Staatsmacht, was lehrt uns Linz ?* 1927, S. 79-82.
- 10 猪木正道訳「国家権力をめぐる闘争」『民主的社会主義』中央公論社, 1960年5月 (pp. 77~80)

- 11 岩城忠一「二つの社会化綱領(ブハーリンの『共産党綱領』とバウアーの『社会主義への道』とに現はれたる社会化諸方策の管見)」『商学論叢』1-2, 1926年*
- 12 河西太一郎「農業問題に於ける社会民主党と共産党」1927年1月〔→V-49〕
- 13 河田嗣郎「独逸社会民主党の農政綱領」1927年9月〔→V-51〕
- 14 村瀬興雄『ヒトラー——ナチズムの誕生』誠文堂新光社, 1962年7月 (viii, 5, 429, 11p.)
- 15 矢田俊隆「オーストリア社会民主党と民族問題」『スラウ研究』〔北海道大〕7, 1963年3月 (pp. 15~56)
- 16 村瀬興雄「ヨーロッパの社会主義像——カウツキー・バウアー・第2インターナショナル」1965年3月〔→II-172, V-142〕
- 17 矢田俊隆『近代中欧の自由と民族』吉川弘文堂(ユーラシア文化史選書4), 1966年5月 (11, 346, 9 p.)
- 18 米川紀生「Otto Bauer: *Einführung in die Volkswirtschaftslehre*」『一橋論叢』62-2, 1969年7月 (pp. 114~120)
- 19 米川紀生「Rudolf Hilferding の『金融資本論』書評について——一つの資料紹介」1971年5月〔→IV-166〕
- 20 静田均「資本蓄積と帝国主義をめぐる一論争——O. バウエル対 R. ルクセンブルク」(1)(2)1972年3月〔→III-292〕
- 21 村瀬興雄「1930年代のオーストロ・マルクス主義——オットー・バウアーの理論を中心として」『季刊 社会思想』3-2, 1973年8月 (pp. 1~20) →VI-22, 23
- 22 矢田俊隆「オーストリア社会民主党の民族理論」1973年8月〔→V-222, VI-21〕 (pp. 21~33)
- 23 酒井晨夫「1919年における経営評議会と社会化について」1973年8月〔→VI-21〕 (pp. 34~47)
- 24 米川紀生「Otto Bauer の社会化論の準備的考察のために」『経済論集』〔新潟大〕14, 1973年8月 (pp. 1~11)
- 25 酒井晨夫「ソビエト・ロシアとオットー・バウアー」『経済研究』〔一橋大〕25-1, 1974年1月 (pp. 77~82)
- 26 米川紀生「Otto Bauer の社会化論の準備的考察」『経済論集』22, 1976年7月 (pp. 27~44)

- 27 矢田俊隆『ハブスブルク帝国史研究——中欧多民族国家の解体過程』岩波書店、1977年10月 (xi, 603, 8 p.)
- 28 内田忠男「オットー・バウア研究——ファシズムと民主主義」『岐阜経大論集』11-4, 1977年12月 (pp. 17~51)
- 29 米川紀生「資料 Otto Bauer の二月闘争論」『経済論集』24, 1978年1月 (pp. 103~117)
- 30 上条勇「オットー・バウアーの『経済領域』論」『経済学研究』〔北海道大〕30-3, 1980年11月 (pp. 235~256)
- 31 荒又重雄「複雑労働論補遺——W. リーブクネヒトおよびO. バウアーの所説によせて」『経済学研究』31-2, 1981年8月 (pp. 25~36) →VI-208
- 32 青山孝徳「オーストリア社会化とオットー・バウアー」『経済科学』〔名古屋大〕29-1, 1981年9月 (pp. 31~52)

b ベーベル (August Bebel, 1840~1913)

Die Frau und der Sozialismus, Zürich-Hottingen 1879. 2. Aufl., *Die Frau in der Vergangenheit, Gegenwart und Zukunft*, Zürich 1883. 50. Aufl., Stuttgart 1910. 59. Aufl., Berlin 1929. Englisch Übers., *Woman in the Past, Present and Future*, London 1895. 3. ed., 1915. *Woman : Past, Present and Future*, New York 1910. New York, 1918.

- 33 村上正雄訳『社会主義と婦人 (過去)』三田書房, 1919年8月*
- 34 牧山正彦訳『婦人と社会主義』全5冊, 弘文堂書房, (1)1922年10月 (14, 3, 192p.) (2)1923年2月 (3, 193~440 p.) (3)1923年5月 (2, 441~647p.) (4)1923年11月 (4, 649~853p.) (5)1924年5月 (3, 855~1058p.)
- 35 山川菊栄訳『婦人論——婦人の過去・現在・未来』アルス, 1923年3月 (4, 8, 10, 752p.)
- 36 牧山正彦訳『現代の婦人』(婦人と社会主義第2篇)『現代婦人』(婦人と社会主義ノ内), 弘文堂, 1923年*
- 37 山川菊栄訳『婦人の過去 現在 未来』世界文献刊行会 (世界婦人文献7), 1925年10月 (9, 8, 705p.)
- 38 山川菊栄選〔抄訳〕「無産婦人の義務 (昭和女子新読本第5章)」『婦人公論』1927年3月 (pp. 40~42)
- 39 加藤一夫訳『婦人論』『社会思想全集』33, 平凡社, 1927年12月 (7, 20, 540p.)
- 40 山川菊栄訳『婦人論——婦人の過去・現在・未来』普及版 (全2巻), アルス, 1928年7月*
- 41 草間平作訳『婦人論』全2冊, 岩波文庫, (上) 1928年12月* (下) 1929年3月*/ (上) 改版1952年8月 (421p.) (下) 改訳1955年7月 (267p.) / (上) 改訳1971年1月 (408p.) (下) 改版1981年5月 (272p.)
- 42 山川菊栄訳『婦人論』改造文庫1-15, 1929年2月 (591p.) / 覆刻版1977年2月
- 43 森下修一訳『婦人論』全2冊, 角川文庫, (上) 1955年9月 (410p.) (下) 1955年10月 (274p.)
- 44 伊東勉・土屋保男訳『婦人論』全2冊, (上) 1958年5月 (VIII, 255p.) (下) 1958年6月 (256~519, 28p.)

Enquête internationale sur le Socialisme et l'Internationale, IV, *La Vie Socialiste*, I-16, 1905.

- 45 〔無署名〕「社会主義と愛国心」『直言』2-30, 1905年8月27日 (p. 1)

Aus meinem Leben, 3 Bde., Stuttgart 1910-14.

- 46 波多野鼎抄訳『ベーベル自叙伝』大鑑閣, 1921年9月 (2, 6, 316p.)

Der politische Massenstreik und die Sozialdemokratie, Berlin 1906.*

- 47 堺利彦抄訳『政治的総同盟罷工論』『社会主義研究』5, 1906年8月 (pp. 11~24)
- 48 田所輝明訳『政治的大衆罷工に就いて』白揚社, 1928年*
- 49 大杉栄「ベーベル伝」『社会主義研究』5, 1906年8月 (pp. 38~43)
- 50 堀真琴「アウグスト・ベーベルと社会民主党前史」1925年7月 [→V-41]
- 51 山川菊栄「ベーベル 婦人論」『ベーベル. ミル婦人解放論』鱗書房 (社会思想新書14), 1947年7月 (pp. 35~168) / 啓示社, 1949年3月*
- 52 ダイジェスト・シリーズ刊行会編『婦人解放の歴史 ベーベルの人と作品』ジブ社 (ダイジェスト・シリーズ9), 1950年6月 (125p.)
- 53 新島繁「婦人と社会主義」『社会科学文献解題』I, 春秋社, 1950年8月 (pp. 295~299)
- 54 倉田稔「ベーベル研究のために」『社会事業の諸問題』〔日本社会事業大学研究紀要〕18, 1970年12月 (pp. 85~109)
- 55 中山そみ「ベーベル『婦人論』について」『女性史研究』〔家族史研究会〕1, 1975年12月 (pp. 23~29)

- 56 犬丸義一「日本におけるマルクス主義婦人解放思想の歩み——明治期を中心に」藤原彰・松尾尊允編『論集 現代史』筑摩書房、1976年10月 (pp. 97~129)
- 57 倉田稔「ベーベルのはじめの婦人論」(1) (2)『人文研究』〔小樽商科大〕49, 1975年3月 (pp. 75~86). 58, 1979年7月 (pp. 64~80)
- 58 祇園寺則夫「アウグスト・ベーベルと1860年代のドイツ労働者運動」『法学』〔東北大〕43-3, 1979年12月 (pp. 167~186)
- 59 犬丸義一「ベーベル『婦人論』刊行百年によせて——日本への翻訳ノート」『歴史評論』357, 1980年1月 (pp. 81~84)
- 60 西川正雄「『婦人論』とアウグスト・ベーベル——発刊(1879)100周年に寄せて」『歴史評論』359, 1980年3月 (pp. 3~18)

c ベーア (Max Beer, 1864~ca. 1940)

A History of British Socialism, 2 vols., London 1919. London 1929. London 1940.

- 61 小島幸治訳『近代英国社会主義史』〔第4篇の訳〕大日本文明協会、1922年9月 (8, 12, 2, 6, 14, 334p.)
- 62 加田哲二訳『英国社会主義史』(1)『世界大思想全集』II-21, 春秋社、1929年9月 (16, 405p.)
- 63 園乾治訳『英国社会主義史』(2)『世界大思想全集』II-22, 1929年12月 (10, 444p.)
- 64 大島清訳『イギリス社会主義史』全4冊, 岩波文庫, (1)1968年11月 (282p.) (2)1970年6月 (285p.) (3)1972年5月 (286p.) (4)1975年8月 (350p.)

Karl Marx - Eine Monographie, Berlin 1918. *Karl Marx, sein Leben und seine Lehre*, 3. vermehrte Aufl., 1921.

- 65 西雅雄訳『マルクスの生涯と学説』三徳社書房 (社会科学叢書2), 1923年3月 (4, 4, 4, 288p.)

Ursprung und Wesen des Gildensozialismus, NZ, 39.Jg., Nr. 18, 1921.

- 66 小泉鉄訳「ギルド社会主義の起原と本質」『我等』4-1, 1922年1月 (pp. 73~78)

Allgemeine Geschichte des Sozialismus und der sozialen Kämpfe, 1922~23. 6. Aufl., Berlin 1929.

- 67 〔無署名〕抄訳「古代希臘に於ける共產主義的革命——その発端」『我等』4-12, 1922年12月 (pp. 61~66)
- 68 津曲——抄訳「スパルタに於ける共產主義」『我等』5-3, 1923年3月 (pp. 58~67)
- 69 西雅雄訳『古代の社会闘争』(社会主義史第1篇), 白揚社, 1925年4月 (4, 5, 228p.)
- 70 西雅雄訳『中世の社会思想』(社会主義史第2篇), 白揚社, 1925年10月 (2, 4, 220p.)
- 71 西雅雄訳『近古の農民戦争』(社会主義史第3篇), 白揚社, 1926年1月 (2, 6, 222p.)
- 72 西雅雄訳『近世労働者階級の抬頭』(社会主義史第4篇), 白揚社, 1926年3月 (2, 6, 230p.)
- 73 西雅雄訳『マルクス主義の時代』(社会主義史第5篇), 白揚社, 1926年4月 (2, 6, 254p.)
- 74 西雅雄・田畑三四郎訳『新版・改訳 社会主義通史』白揚社, 1932年3月 (3, 16, 914, 38p.)
- 75 西雅雄訳『社会思想史』三一書房, 1951年7月 (6, 15, 622, 25p.)

Fifty years of International Socialism, 1935.

- 76 坂井萬之助抄訳「エンゲルスの横顔」「レーニンとの会見記」「ナチス主義に対して」『歴史科学』5-1, 1936年1月 (pp. 117~125). 5-2, 1936年2月 (pp.90~102). 5-4, 1936年4月 (pp.98~106)

〔原タイトル名不明〕

- 77 白柳秀湖訳「総同盟罷工の歴史及意義」『社会主義研究』5, 1906年8月 (pp. 1~11)
- 78 栗原古城訳『社会闘争と社会主義先駆者』日本読書協会 (日本読書協会叢書5), 1925年*
- 79 三辺金蔵「マルクスの価値論に対する Beer の批評」『三田学会雑誌』18-2, 1924年2月 (pp. 144~149)
- 80 新島繁「イギリス社会主義史」『社会科学文献解題』I, 春秋社, 1950年8月 (pp. 15~20)
- 81 新島繁「社会主義通史」『社会科学文献解題』〔→VI-80〕(pp. 157~161)

d クーノ (Heinrich Wilhelm Carl Cunow, 1862~1936)

Zur Urgeschichte der Ehe und Familie, Ergänzungshefte zur Neuen Zeit, Nr. 14, 1912.

82 服部之総抄訳「モルガンの誤謬」『我等』9-1, 1927年1月 (pp. 111~122)

83 服部之総訳『婚姻及家族の原史について』弘文堂書房, 1927年9月 (3, 221p.)

Die Marxsche Geschichts-, Gesellschafts- und Staatstheorie. Grundzüge des Marxschen Soziologie, 2 Bde., Berlin 1920-21.

84 河野密訳『マルクス歴史社会国家学説』上, 而立社 (社会科学大系10), 1924年3月 (14, 538p.)

85 東京帝大社会科学研究会・法制研究会訳『マルクスの民族, 社会並に国家観』〔第2巻部分訳〕, 同人社, 1926年7月 (2, 5, 84p.)

86 同訳『マルクスの階級闘争理論』〔第2巻部分訳〕, 同人社, 1926年10月 (2, 5, 57, 21p.)

87 鳥海篤助抄訳「マルクスの歴史理論とその変改者」『社会科学』2-8, 1926年10月 (pp. 219~232)

88 東京帝大社会科学研究会・法制研究会訳『マルクスの経済概念』〔第2巻部分訳〕, 同人社, 1926年11月 (2, 5, 75 p.)

89 鳥海篤助・浜島正金訳『マルクスの唯物論的歴史理論』〔第2巻部分訳〕, 同人社, 1927年*

90 東京帝大社会科学研究会・法制研究会訳『マルクス主義と倫理』〔第2巻部分訳〕, 同人社, 1927年*

91 森谷克巳訳『マルクスの唯物弁証法』〔第2巻部分訳〕, 同人社, 1927年5月 (2, 5, 80p.)

92 河野密訳『マルクス歴史・社会・国家学説』『社会思想全集』22, 平凡社, 1928年7月 (4, 7, 766p.)

93 鳥海篤助・森谷克巳・浜島正金訳『マルクスの歴史社会並に国家理論』下, 改造文庫1-47, 1929年11月 (694p.)

94 石川準一郎・別府峻介訳『マルクスの歴史社会並に国家理論』上, 改造文庫1-46, 1934年4月 (591p.)

Allgemeine Wirtschaftsgeschichte : Ein Übersicht über die Wirtschaftsentwicklung von der primitiven Sammelwirtschaft bis zum Hochkapitalismus, 4 Bde., Berlin 1926-31.

95 高山洋吉訳『経済全史』全8冊, 東学社, (1)1937年4月 (2, 2, 4, 312p.) (2)1937年5月 (1, 4, 309, 2p.) (3)1937年6月 (2, 1, 4, 289, 2 p.) (4)1937年7月 (4, 269p.) (5)1937年8月 (1, 5, 275p.) (6) 1937年9月 (5, 272p.) (7)1937年10月 (2, 5, 268p.) (8)1937年12月 (4, 264p.)

96 藤沢保太郎『世界経済史大系』全4冊, 育生社弘道閣, (1)1941年9月 (3, 2, 8, 661p.) (2)1941年10月 (1, 8, 594p.) (3)1941年11月 (1, 10, 582p.) (4)1941年12月 (11, 618p.)

〔原タイトル名不明〕

97 〔無署名〕「無産階級の独裁とカール・マルクス」『解放』4-4, 1922年*

98 マルクス書房編輯部抄訳「階級的立場は収益の多寡によって決定されない」『マルクス学教科書』4, 1929年4月 (pp. 82~84)／「階級と党」(pp. 121~130)／「フランス・ブルジョアジーの指令に現はれた, 1789年のブルジョアジー」『マルクス学教科書』5, 1929年4月 (pp. 78~81)／「国民議会における憲法獲得闘争」(pp. 81~84)／「国民議会の立法」(pp. 85~86)／「実業ブルジョアジーの代表者としてのジロンド党」(pp. 87~90)

99 竹内徳治「エアフルト綱領改正草案に対するキューノーの批評」『国家学会雑誌』35-12, 1921年12月 (pp. 126~133)

100 玉城堡「母権支配の経済的基礎」『社会学雑誌』〔日本社会学会〕4-39, 1927年7月 (pp. 62~71). 4-40, 1927年8月 (pp. 58~73)

101 喜多野清一「クノウ『一般経済史』(紹介及批評)」『法政大学論集』3-2, 1927年12月 (pp. 223~237)

102 増谷達之輔「クノウ原著(服部之総訳)『婚姻及家族の原史について』」『社会学雑誌』4-44, 1927年12月 (pp. 81~83)

103 広田司朗「H.クーノーの租税思想」『商学論集』〔関西大〕1-6, 1957年3月 (pp. 1~25)

104 柳原太郎「クノーとカウツキーの国家論争——国家と社会の問題に関連して」1976年11月〔→II-216〕

105 相田慎一「クーノーの『崩壊理論』(1898)」『講座 経済学史』4, 1977年4月〔→I-80〕 (pp. 55~60)

e エンゲルス (Friedrich Engels, 1820~1895)

- 106 嘉治隆一「エルフルト綱領とエンゲルス」『社会思想』4-12, 1925年12月 (pp. 23~39)
- 107 正田庄次郎「議会制度とエンゲルス」『三田学会雑誌』53-8, 1960年8月 (pp. 16~32)
- 108 木下悦二「貿易問題におけるマルクスとエンゲルス」『経済学雑誌』44-6, 1961年6月 (pp. 1~25)
- 109 小山治夫「エンゲルスの平和思想」『思想』452, 1962年2月 (pp. 52~68)
- 110 平田清明「晩年のエンゲルス——マルクス主義研究序説」『経済科学』9-3, 1962年5月 (pp. 114~134)
- 111 杉原四郎「マルクス経済学(Ⅰ) 晩年のマルクスとエンゲルス」『経済セミナー』92, 1964年2月 (pp. 72~77) / 「同
(Ⅱ) 独占資本主義経済への展望」『経済セミナー』93, 1964年3月 (pp. 67~71)
- 112 浅井啓吾「晩年のエンゲルスにみるドイツ革命の戦術論」『経済系』68, 1966年3月 (pp. 45~54)
- 113 飯田鼎「残された問題——修正主義との闘い」『マルクス主義における革命と改良——第1 インターナショナルにお
ける階級, 体制および民族の問題』御茶の水書房, 1966年5月 (pp. 367~375)
- 114 山之内靖「マルクス・エンゲルスのドイツ資本主義論——類型認識の成立過程を中心として」『エコノミア』〔横浜国
大〕37, 1968年9月 (pp. 33~78) / 『マルクス・エンゲルスの世界史像』未来社, 1969年1月 (pp. 185~237)
→VI-115
- 115 山之内靖「マルクス・エンゲルスのロシア社会論」『東京外国語大学論集』18, 1968年12月 (pp. 1~30) / 『マルク
ス・エンゲルスの世界史像』〔→VI-114〕(pp. 238~284)
- 116 富沢賢治「エンゲルスの19世紀末イギリス労働運動論」『一橋論叢』61-1, 1969年1月 (pp. 19~36)
- 117 降旗節雄「エンゲルスと帝国主義」『思想』539, 1969年5月 (pp. 85~101) / 『帝国主義論の史的展開』〔→II-195〕
(pp. 34~61)
- 118 杉原四郎「エンゲルス研究の動向」『思想』549, 1970年3月 (pp. 68~78) / 『マルクス・エンゲルス文献抄』未来
社, 1972年11月 (pp. 84~106) →VI-123
- 119 浅田喬二「マルクス・エンゲルスのロシア革命論」『土地制度史学』48, 1970年7月 (pp. 1~17)
- 120 淡路憲治「晩年のエンゲルスのロシア像」(Ⅰ)『岡山経済雑誌』2-2, 1970年8月 (pp. 66~211) / 〔「ロシアにお
けるマルクスとエンゲルス」と改題のうえ〕『マルクスの後進国革命像』未来社, 1971年2月 (pp. 299~329)
- 121 坂脇昭吉「戦前のわが国におけるエンゲルス研究文献について——エンゲルス生誕150年によせて」『千里山経済学』
〔関西大・大学院〕4, 1970年10月 (pp. 37~57)
- 122 淡路憲治「晩年のエンゲルスのロシア像」『思想』557, 1970年11月 (pp. 37~57) / 〔「マルクス死後のエンゲルスの
ロシア像」と改題のうえ〕『マルクスの後進国革命像』〔→VI-120〕(pp. 331~380)
- 123 杉原四郎「エンゲルスの統一的全体像をもとめて(Ⅱ)——わが国のエンゲルス研究史の素描, (Ⅲ)——戦後わが国のエン
ゲルス研究概観」『思想』557, 1970年11月 (pp. 25~36). 558, 1970年12月 (pp. 89~99) / 『マルクス・エン
ゲルス文献抄』〔→VI-118〕(pp. 107~154)
- 124 川鍋正敏「エンゲルスの「産業循環変形論」について」『ドイツ資本主義の史的構造』1972年3月〔→IV-175〕(pp.
267~284)
- 125 坂脇昭吉「戦後のわが国におけるエンゲルス研究文献について」『研究紀要』〔鹿児島大教育学部〕23 (人文・社会科
学篇), 1972年3月 (pp. 78~106)
- 126 淡路憲治「ロシア論におけるマルクスとエンゲルス——平田・竹内論争を中心として」『経済研究』〔一橋大〕23-3,
1972年7月 (pp. 224~234)
- 127 山本佐門「フリードリッヒ・エンゲルスのヴィルヘルム帝国論」『釧路論集』5, 1973年7月 (pp. 25~49) / 『ドイ
ツ社会民主党とカウツキー』〔→V-298〕(pp. 1~32)
- 128 大野節夫「エンゲルスの1895年「序文」」『経済学論叢』〔同志社大〕22-2・3・4, 1974年7月 (pp. 82~117)
- 129 淡路憲治「エンゲルスの“政治的遺書”について(Ⅱ)——それをめぐる論争の流れ, (Ⅲ)——執筆・抹消の経緯」『思想』
602, 1974年8月 (pp. 60~80). 603, 1974年9月 (pp. 133~146) / 『西欧革命とマルクス, エンゲルス』〔→
V-248〕(pp. 235~289)
- 130 山本統敏「解説 エンゲルスと第2 インターナショナル」『第2 インターの革命論争』1975年5月〔→I-8〕(pp.
1~29)
- 131 淡路憲治「エンゲルスの保護関税論——ビスマルク関税批判について」大内力編『現代資本主義と財政・金融』1 (国
家財政), 東京大学出版会, 1976年8月 (pp. 17~30)

- 132 淡路憲治「エンゲルスとドイツ社会民主党——『フランスとドイツにおける農民問題』を中心として」(1)~(3), 1976年12月~1977年6月〔→V-248〕/『西欧革命とマルクス, エンゲルス』〔→V-248〕(pp.143~234)
- 133 倉田稔「フリードリヒ・エンゲルスの実像を求めて——カール・マルクス『フランスにおける階級闘争』へのエンゲルスの序文(1895年)」『人文研究』53, 1977年3月(pp. 99~124)
- 134 星野中「資本主義発展の歴史的傾向と新段階——マルクス, エンゲルス」『帝国主義研究』II, 1977年3月〔→I-78〕(pp. 11~90)
- 135 淡路憲治「『崩壊論』とベルンシュタイン——晩年のエンゲルスとベルンシュタイン」1977年3月〔→I-78〕
- 136 岡崎三郎「エンゲルスと国際社会主義運動」『唯物史観』19, 1978年5月(pp. 85~97)

f ホブソン (John Atkinson Hobson, 1858~1940)

Problems of Poverty, London 1891.

- 137 遠藤十郎訳述『貧民問題』東光館, 1897年6月(2, 3, 2, 1, 2, 270p.)

The Evolution of Modern Capitalism, London 1894. rev. eds., 1906, 1916, 1926.

- 138 石井静人訳『近代資本制発達史』〔前半7章の訳〕巖松堂書店, 1928年4月(4, 2, 2, 7, 324p.)
- 139 松沢兼人・住谷悦治・阪本勝訳『近代資本主義発展史論』弘文堂, 1928年6月(5, 1, 2, 2, 16, 592, 28p.)
- 140 住谷悦治・阪本勝・松沢兼人訳『近代資本主義発展史論』改造文庫1-54, 1932年4月(376p.). 1-55, 1932年6月(422, 83p.)／覆刻版, 1977年2月

The Problem of the Unemployed, London 1896.

- 141 遊佐敏彦訳『失業者問題の研究及経済政策』法制時報社, 1922年4月(5, 3, 6, 183p.)

Free Trade and Foreign Policy, *The Contemporary Review*, vol. 74, Aug. 1898, pp.167-80.

- 142 入江節次郎訳「資料 J. A. ホブソン『自由貿易主義と対外政策』」『経済学論叢』22-5, 1974年10月(pp. 52~77)

Capitalism and Imperialism in South Africa, *The Contemporary Review*, vol. 77, Jan. 1900.

- 143 入江節次郎訳「資料 J. A. ホブソン『南アフリカにおける資本主義と帝国主義』」『経済学論叢』23-3・4, 1975年6月(pp. 190~226)

Imperialism. A Study, London 1902. rev. eds., 1905, 1938, 1948.

- 144 時国理一訳『帝国主義論(一つの研究)』『社会思想全集』35, 平凡社, 1928年12月(pp. 421~741)
- 145 石沢新二訳『帝国主義論』改造文庫1-64, 1930年9月(452p.)／覆刻版, 1977年2月
- 146 矢内原忠雄訳『帝国主義論』全2冊, 岩波文庫, (H)1951年8月(188p.) (F)1952年6月(321, 16p.)

The Science of Wealth, London 1911.

- 147 福田秀一訳『富の研究』大鑑閣, 1922年7月(2, 2, 2, 1, 324p.)

Economics of Unemployment, New York 1922. rev. ed., 1931.

- 148 今村源三郎訳『失業経済』大日本文明協会, 1925年3月(6, 8, 4, 2, 326p.)
- 149 内垣謙三訳『失業経済学』同人社, 1930年5月(3, 6, 2, 183p.)

Poverty in plenty : The Ethics of Income, New York 1931.

- 150 中島徹三訳『世界経済の統一——なぜ豊年の饑饉か?』千倉書房, 1931年12月(7, 2, 144p.)

Veblen, London 1936. Rep., New York 1963.

- 151 佐々木専三郎訳『ヴェブレン』文真堂, 1980年3月(iv, 183, 3 p.)

- 152 磯部浩一「J. A.ホブソンに関する一試論——かれの厚生経済学を中心として」『明治学院論叢』20, 1950年11月 (pp. 73~95)
- 153 静田均「帝国主義の経済学(1)——J. A.ホブソンに関する省察」『経済論叢』71-1, 1953年1月 (pp. 50~62)
- 154 川田侃「ホブソン経済学の素描」『経済学論集』22-1, 1954年7月 (pp. 17~60)／「J. A.ホブソンの経済学とその帝国主義論」と改題のうえ」『帝国主義と権力政治』東京大学出版会, 1963年11月 (pp. 63~105)
- 155 静田均「反帝国主義者ホブソン——帝国主義の経済学(2)」『経済論叢』74-3, 1954年9月 (pp. 1~18)
- 156 山下重一「J. A.ホブソン〔社会思想評伝〕」『社会思想研究』7-7, 1955年7月 (pp. 23~30)
- 157 磯部浩一「J. A.ホブソンの資本の集中・独占の理論」『明治学院論叢』40-2, 1956年2月 (pp. 51~67)
- 158 清水嘉治「J. A.ホブソンに関する試論(1)——『帝国主義論』成立までの思想と生活について」『経済系』31, 1956年9月 (pp. 19~33)
- 159 清水嘉治「J. A.ホブソン『帝国主義論』の経済学的性格——ホブソン試論(1)」『経済系』33・34, 1957年3月 (pp. 53~70)
- 160 磯部浩一「経済学と社会関係——J. A.ホブソンにみたる」上田辰之助監修「近代社会の諸問題——経済発展と社会関係」有信堂, 1957年5月 (pp. 149~179)
- 161 磯部浩一「J. A.ホブソン研究——『帝国主義論』をめぐる一試論」『一橋論叢』37-5, 1957年5月 (pp. 115~130)
- 162 清水嘉治「J. A.ホブソンの経済学の基盤について」『一橋論叢』37-6, 1957年6月 (pp. 77~83)
- 163 磯部浩一「J. A.ホブソンのインターナショナリズムに関する一試論——『国際人, リチャード・コブデン』をめぐる」『明治学院論叢』46-2 (経済研究5), 1957年10月 (pp. 37~52)
- 164 磯部浩一「ネマーズ著『ホブソンと過少消費』」『一橋論叢』39-6, 1958年6月 (pp. 40~46)
- 165 清水嘉治「E. E.ネマーズの『ホブソンと過少消費』の若干の問題について」同上誌 (pp. 46~53)
- 166 清水嘉治「帝国主義の型について——ウィンズロー教授の見解を中心として」『一橋論叢』40-1, 1958年7月 (pp. 82~88)
- 167 清水嘉治「ホブソン『帝国主義論』研究の現代的課題——ホブソン生誕100年にあたって」『経済系』40, 1958年9月 (pp. 1~14)
- 168 山田秀雄「ホブソン『帝国主義論』に関する覚書——Financierの評価をめぐる」『経済研究』10-1, 1959年1月 (pp. 76~79)
- 169 山田秀雄「ジョン・アトキンソン・ホブソン——その『帝国主義論』を中心として」『一橋論叢』41-4, 1959年4月 (pp. 62~76)
- 170 清水嘉治「帝国主義論の諸類型——ウィンズローの型規定を中心として」『最近の独占研究』1959年6月 (→IV-94) (pp. 278~291)
- 171 清水嘉治「ホブソンの『社会主義』論について」『一橋論叢』42-5, 1959年11月 (pp. 116~123)
- 172 戸田武雄「J. A.ホブソンの経済学」『社会科学』〔静岡大〕9, 1960年12月 (pp. 45~61)
- 173 磯部浩一「J. A.ホブソン研究序説(1)——経済政策思想史研究」『経済論集』〔明治学院大〕1, 1962年11月 (pp. 37~55)
- 174 磯部浩一「イギリス経済政策思想の展開における一断面——J. A.ホブソンの『帝国主義論』形成過程をめぐる」『一橋論叢』49-1, 1963年1月 (pp. 1~17)
- 175 山田秀雄「イギリスにおける帝国主義論の生成」『経済学史講座』3, 1965年6月 (→IV-127) (pp. 99~123)
- 176 河合秀和「帝国主義研究の一視角——レーニンとホブソン」『思想』499, 1966年1月 (pp. 1~10)／「イギリス帝国主義小論」と改題のうえ」『現代イギリス政治史研究』岩波書店, 1974年2月 (pp. 156~182)
- 177 磯部浩一「イギリスにおける独占形成とホブソン」『一橋論叢』55-3, 1966年3月 (pp. 55~69)
- 178 清水嘉治「非マルクス主義帝国主義論の原型——とくにホブソンとシェンペーターの所説を中心として」『経済系』69, 1966年6月 (pp. 1~16)
- 179 戸田武雄「J. A.ホブソンからみた学説史の構造」『研究論集』〔駒沢大〕10, 1967年6月 (pp. 1~16)
- 180 磯部浩一「政策形成過程における経済的要素と政治的要求——J. A.ホブソン『帝国主義論』形成過程の再検討」『経済論集』14, 1970年11月 (pp. 113~142)
- 181 佐々木徹「J. A.ホブソン『帝国主義論』の基本的性格」『社会科学』〔同志社大〕4-2, 1971年3月 (pp. 114~137)
- 182 降旗節雄「資本輸出と金融寡頭制——ホブソン『帝国主義論』の論理と対象」『帝国主義論の史的展開』1972年3月 (→II-195) (pp. 150~170)
- 183 入江節次郎「J. A.ホブソン『帝国主義研究』の論理構成」『経済学論叢』22-2・3・4, 1974年7月 (pp. 18~81)／

入江・星野編『帝国主義研究』II, 1977年3月〔→I-78〕(pp. 139~200)

- 184 S. Irie〔入江節次郎〕“Capitalism in World Economy : Imperialism and J. A. Hobson”『経済学論叢』25-1・2, 1976年12月 (pp. 133~143)
- 185 入江節次郎「J. A. ホブソンのインターナショナリズム——その世界政府樹立の構想を中心に」『人文学報』〔京都大〕43, 1977年3月 (pp. 37~62)／『帝国主義の解明』新評論, 1979年4月 (pp. 140~160)

g K. リーブクネヒト (Karl Liebknecht, 1871~1919)

Militarismus und Antimilitarismus unter besonderer Berücksichtigung der internationalen Jugendbewegung, Berlin 1907.

- 186 山本統敏他抄訳「軍国主義と反軍国主義」『第2 インターの革命論争』1975年5月〔→I-8〕(pp. 427~435)

Militarismus und Antimilitarismus, Zürich 1908.

- 187 新明正道訳『軍国主義論』三田書房, 1921年11月 (6, 2, 4, 303p.)
- 188 松下芳男訳『軍国主義論』『社会思想全集』21, 平凡社, 1930年8月 (pp. 317~590)

Das, was ist, *Die Rote Fahne*, Nr. 6 vom 21. Nov. 1918.

- 189 野村修訳「現状」同編『ドイツ革命』平凡社 (ドキュメント現代史2), 1972年12月 (pp. 65~68)
- 190 山川菊栄「リーブクネヒトとルクセンブルグ」1919年7月, 9月〔→III-164〕
- 191 山川均「殺される前のリーブクネヒト」『新社会』6-7, 1920年1月 (pp. 14~19)
- 192 山川菊栄述「リーブクネヒトとルクセンブルグ」1921年10月〔→III-165〕
- 193 福田徳三「リーブクネヒト獄中遺稿 マルクス価値論批評」(1)~(3)『改造』5-3, 1923年3月 (pp. 4~25). 5-4, 1923年4月 (pp. 53~76). 5-6, 1923年6月 (pp. 80~104)
- 194 T I 生〔石浜知行〕「カールとローザの夕 (放浪記)」1925年3月〔→III-171〕
- 195 山川菊栄「リーブクネヒトとルクセンブルグ」1925年12月〔→III-174〕
- 196 千葉雄次郎「二人の革命家——ドイツ革命夜話」『社会思想』5-7, 1926年8月 (pp. 47~52)
- 197 岡田忠一編訳『非軍国主義論』(革命家演説集2), 金星堂, 1928年5月*
- 198 平野義太郎「カール リーブクネヒト, ローザ・ルクセンブルグ虐殺50周年によせて」1969年3月〔→III-266〕
- 199 山本佐門「第1次大戦下におけるドイツ社会民主党左派, カール・リーブクネヒト」1972年2月〔→V-203〕

h W. リーブクネヒト (Wilhelm Liebknecht, 1826~1900)

Zur Grund- und Bodenfrage, Leipzig 1874. 2. Aufl., Leipzig 1876.

- 200 河西〔太郎〕抄訳「イギリスの土地問題」『社会思想』6-1, 1927年1月 (pp. 46~52)
- 201 河西太郎訳『土地問題論』改造社, 1928年1月 (7, 7, 331p.)

Karl Marx, zum Gedächtniss : ein Lebensabriss und Erinnerungen, Nürnberg 1896.

- 202 志津野又郎抄訳「マルクス伝」『社会主義研究』1, 1906年3月 (pp. 38~48)
- 203 小椋広勝訳註『カール・マルクス追憶』刀江書院, 1927年*

Zur Geschichte der Werttheorie in England, 1902.

- 204 八木沢善次訳『英国価値学説史』弘文堂 (社会思想叢書5), 1926年7月 (19, 3, 3, 263p.)

Volks-Fremdwörterbuch, 1874. 20. Aufl., 1929.

- 205 『外来独逸語辞典』刀江書院, 1963年12月 (XVI, 600p.)
- 206 河西太郎「エカリウスとリーブクネヒト」『マルクス経済学説の発展』上, 1929年6月〔→II-129〕(pp. 50~70)／

『マルクス主義に於ける農業理論の発展』研進社, 1946年9月 (pp. 45~66)

- 207 歆喜隆司・船尾日出志・鶴鷹はるみ・浜田恭代「革命的ドイツ労働運動の陶冶政策的・教育学的伝統の継承と消化と発展——W. リープクネヒト, C. ツェトキン, E. ヘルンレ, Th. ノイバッアーの進歩的教育遺産」『大阪教育大学紀要』24-V-2, 1976年1月 (pp. 85~141) →VI-281
- 208 荒又重雄「複雑労働論補遺——W. リープクネヒトおよびO. バウアーの所説によせて」1981年8月 [→VI-31]

i メーリング (Franz Mehring, 1846~1919)

Arthur Schopenhauer, *Volkszeitung*, 22. Feb. 1888.

- 209 山崎八郎訳「アルトゥール・シュOPENハウアー」『世界大思想全集』2-15, 河出書房新社, 1960年1月 (pp. 283~285) →VI-210, 219, 221, 227, 228

Zur Philosophie des Kapitalismus, *Kapital und Presse*, 1891.

- 210 山崎八郎訳「資本主義の哲学」『世界大思想全集』[→VI-209] (pp. 289~295)

Die Lessing-Legende. Eine Rettung von F. Mehring. Nebst einem Anhang über den historischen Materialismus, Stuttgart 1893.

- 211 土方・麻生訳「レッシング伝説——第1部」木星社書院, 1932年*
- 212 小森潔・富田弘・戸谷修訳「レッシング伝説」I, 風媒社, 1968年5月 (344p.) / 小森潔・富田弘・望月一樹・酒井史訳「レッシング伝説」II, 風媒社, 1971年11月 (343~659, 17p.)

Über historischen Materialismus, in *Die Lessing-Legende*, Stuttgart 1893.

- 213 マルクス書房編輯部抄訳「史的浪漫学派」『マルクス学教科書』3, 1928年10月 (pp. 28~32) / 「史的唯物主義は歴史の産物である」(pp. 43~44) / 「風土, 種族及び生産方法」(pp. 107~112) / 「発見と発明」(pp. 149~162)
- 214 同抄訳「史的唯物論はイデアを否定しない」『マルクス学教科書』4, 1929年4月 (pp. 41~47)
- 215 岡田宗司訳「史的唯物論に就いて」『唯物史観』叢文閣, 1929年6月 (pp. 1~126) →VI-229
- 216 マルクス書房編輯部抄訳「宗教的動機」『マルクス学教科書』6, 1929年6月 (pp. 62~69)
- 217 同抄訳「自然科学的唯物論と史的唯物論」『マルクス学教科書』8, 1929年9月 (pp. 71~73)
- 218 同抄訳「方法としての史的唯物論」『マルクス学教科書』9, 1929年10月 (pp. 16~18) / 「史的唯物論と道徳的観念論」(pp. 41~43)
- 219 佐藤進訳「史的唯物論について」『世界大思想全集』2-15 [→VI-209] (pp. 233~282)

Zur historisch-materialistischen Methode, *NZ*, 12. Jg., 2. Bd., 1894. S. 142-8, 170-5.

- 220 川口浩訳「文学史の方法のために」『美学及び文学史論』叢文閣 (マルクス主義芸術理論叢書7), 1931年2月 (pp. 147~183) →VI-225, 239

Nietzsche gegen den Sozialismus, *NZ*, 15. Jg., 1. Bd., 1897. S. 545-9.

- 221 山崎八郎訳「ニーチェと社会主義」『世界大思想全集』2-15 [→VI-209] (pp. 304~308)

Geschichte der deutschen Sozialdemokratie, 2 Bde., Stuttgart 1897-98. 8. u. 9. Aufl., 1919. 12. Aufl., 4 Bde., 1922.

- 222 マルクス書房編輯部抄訳「イギリスとフランスの唯物論」『マルクス学教科書』8, 1929年9月 (pp. 14~20) / 「ドイツ観念論」(pp. 35~40) / 「フョイエルバッハ」(pp. 46~48) / 「マルクスのフョイエルバッハ論」(pp. 59~63)
- 223 米田幸雄訳『独逸社会民主党史』(I)『世界大思想全集』II-17, 春秋社, 1931年7月 (414p.) / 高村洋一訳(2)II-18, 1933年1月 (355p.) / 塚本三吉訳(3)II-19, 1932年5月 (409p.) / 塚本三吉訳(4)II-20, 1931年9月 (401p.)
- 224 足利末男・平井俊彦・林功三・野村修訳『ドイツ社会民主主義史』全2冊, ミネルヴァ書房, (H)1968年6月 (597, 27p.) (F)1969年10月 (590, 26p.)

Aesthetische Streifzüge, *NZ*, 17. Jg., 1. Bd., 1898-99. S. 281-8, 314-20, 348-52, 379-84, 410-6, 443-8, 506-12, 538-44, 569-76, 637-40.

川口浩訳「美学的散歩」『美学及び文学史論』〔→VI-220〕(pp. 1~146)

- 226 川口浩抄訳「美学的散歩」『世界芸術論大系』9 (ドイツ現代), 河出書房, 1957年*

Über Nietzsche, *NZ*, 17. Jg., 1. Bd., 1899.

- 227 山崎八郎訳「ニーチェについて」『世界大思想全集』2-15〔→VI-209〕(pp. 295~304)

Zurück auf Schopenhauer, *NZ*, 27. Jg., 2. Bd., 1909. S. 625-8.

- 228 山崎八郎訳「ショーペンハウアーへ帰れ!」『世界大思想全集』2-15〔→VI-209〕(pp. 285~289)

Kant, Dietzgen, Mach und der historische Materialismus, *NZ*, 28. Jg., 1. Bd., 1909. S. 173-83.

- 229 岡田宗司訳「カント, ディーツゲン及びマッハと史的唯物論」『唯物史観』〔→VI-215〕(pp. 127~154)

Deutsche Geschichte vom Ausgange des Mittelalters, 2 Bde., Berlin 1910. Stuttgart 1922.

- 230 栗原佑訳『ドイツ史』改造文庫1-97, 1936年8月(363p.)／覆刻版, 1977年2月

- 231 栗原佑訳『ドイツ社会文化史』大雅堂, 1946年12月(7, 4, 6, 432p.)

- 232 栗原佑訳『マルクス主義の源流——ゲーテからマルクスまで』徳間書房(徳間叢書6), 1965年11月(285p.)／徳間ブックス, 1967年4月(284p.)*

Unsere Altmeister und die Instanzenpolitik, *Internationale*, 15 Apr. 1915, Nr. 1, S. 60-70.

- 233 現代政治思想史研究グループ訳「旧師たちと上層部の政策」『インターナツィオナーレ』〔→III-98〕(pp. 82~93)

Karl Marx. Geschichte seines Lebens, Leipzig 1918. 4. Aufl., 1923.

- 234 大山千代雄抄訳「『哲学の窮乏』に現はれたる唯物史観」『我等』4-5, 1922年5月(pp. 76~84)

- 235 『マルクス伝』白揚社*

- 236 栗原佑訳『カール・マルクス——その生涯の歴史』全2巻, 大月書店, (1)1953年6月(410p.) (2)1953年10月(336, 32p.)

- 237 栗原佑訳『マルクス伝』全3冊, 国民文庫, (1)1974年4月(348p.) (2)1974年4月(316p.) (3)1974年6月(245, 45p.)

- 238 川口浩編訳『世界文学と無産階級』叢文閣(マルクス主義芸術理論叢書3), 1928年12月*

- 239 川口浩「芸術理論家としてのフランツ・メーリング——マルクス主義美学研究のために」『思想』104, 1931年1月(pp. 65~81)／『美学及び文学史論』〔→VI-220〕(pp. 185~210)

- 240 新島繁「ドイツ社会文化史」『社会科学文献解題』I, 1950年8月〔→II-145〕(pp. 253~259)

- 241 新島繁「ドイツ社会民主党史」『社会科学文献解題』I〔→II-145〕(pp. 259~263)

- 242 西川正雄「フランツ・メーリング『ドイツ社会民主主義の歴史』」歴史科学協議会編『歴史の名著〈外国人篇〉』校倉書房, 1971年7月(pp. 142~164)

j バネクーク (Anton Pannekoek, 1873~1960)

Die Akkumulation des Kapitals, *Bremer Bürgerzeitung*, 29-30 Jan. 1913.

- 243 向坂逸郎訳「資本の蓄積」『資本の蓄積と帝国主義』1928年5月〔→VI-7〕(pp. 47~66)

- 244 堺利彦訳『社会主義と進化論——マルクス説とダアキン説との関係』無産社(無産社パンフレット3), 1923年3月(64p.)

- 245 山本秀行「アントン・バネクークとブレーメン社会民主党——ドイツ左翼急進主義の形成」『社会運動史』〔社会運動

史研究会」3, 1973年10月 (pp. 1~25)

- 246 山本秀行「アントン・パネコークとカール・カウツキー」1977年3月〔→II-219〕

k パルヴス (Parvus [Alexander Israel Lazarevitsh Helphand], 1867~1924)

Der Weltmarkt und die Agrarkrise, NZ, 14. Jg., 1. Bd., Nr. 7, 9, 11, 17-8, 21-1, 24-6, 1895-96.

- 247 大藪輝雄・鈴木敏正訳「世界市場と農業恐慌」(1)~(4)『立命館経済学』23-3, 1974年8月 (pp. 106~135). 23-4, 1974年10月 (pp. 119~151). 24-3, 1975年8月 (pp. 92~116). 24-4, 1975年10月 (pp. 107~138)

Staatsstreich und politischer Massenstreik, NZ, 14. Jg., 2. Bd., 1896. S. 199-06, 261-6, 304-11, 356-64, 389-95.

- 248 山本統敏他抄訳「クーデターと政治的大衆ストライキ」『第2インターの革命論争』〔→I-8〕 (pp. 113~136)

Der Opportunismus in der Praxis, NZ, 19. Jg., 2. Bd., 1900. S. 609-15, 659-63, 673-84, 740-8.

- 249 山本統敏他訳「実践上の日和見主義」『第2インターの革命論争』〔→I-8〕 (pp. 70~80)

Die Aufgabe der Sozialdemokratie Rußlands, NZ, 24. Jg., 1. Bd., 1905. S. 451-8.

- 250 山本統敏他訳「ロシア社会民主党の任務」『第2インターの革命論争』〔→I-8〕 (pp. 247~253)

- 251 都留大治郎「農業恐慌と地代——パルヴスを中心として」『経済学研究』〔九州大〕17-4, 1952年1月 (pp. 73~96)

- 252 山口和男「ドイツ社会民主党急進派の革命思想——パルヴスの場合」1965年11月〔→V-149〕

- 253 山口和男「パルヴスの世界資本主義論について」『甲南経済学論集』8-1・2, 1967年7月 (pp. 98~118)／『革命像の模索——急進派パルヴスの登場』と改題・補訂のうえ』『ドイツ社会思想史研究』〔→V-228〕(pp. 67~98)

- 254 山口和男「パルヴスのロシア革命論——ドイツ社会民主党急進派の革命思想」1967年10月〔→V-166〕

- 255 河西勝「パルヴスと帝国主義——論文『世界市場と農業恐慌』を中心に」『経済学研究』〔北海道大〕21-1, 1971年3月 (pp. 193~221)

- 256 山口和男「パルヴスと帝国主義」『思想』568, 1971年10月 (pp. 58~74)／『ドイツ社会思想史研究』〔→V-228〕(pp. 127~156)

- 257 田中良明「パルヴスの労働者民主主義論」『経済学雑誌』〔大阪市立大〕66-1, 1972年1月 (pp. 55~71)

- 258 河西勝「パルヴスと帝国主義——『植民政策と崩壊』を中心に」『経済学研究』21-4, 1972年3月 (pp. 163~194)

- 259 田中良明「ドイツ社会民主党左派の帝国主義認識の前提——世紀転換期までのパルヴスの資本主義＝革命認識」1973年4月〔→V-219〕

- 260 山口和男「ドイツ社会思想史研究——プロイセン・ドイツ国家における社会思想の諸形態」1974年2月〔→V-228〕

- 261 田中良明「パルヴスの帝国主義認識」『経済学雑誌』72-1, 1975年1月 (pp. 79~100)

- 262 山口和男「パルヴス帝国主義論への思想史的アプローチ」『帝国主義研究』II, 1977年3月〔→I-78〕 (pp. 351~371)

l ツェトキン (Clara Zetkin, 1857~1933)

- 263 山川菊栄訳「露独革命と婦人の解放」『種蒔く人』3-4-17, 1923年3月 (pp. 172~175)

- 264 水野正次訳『婦人に与ふ』共生閣 (婦人問題叢書第1篇), 1927年*

- 265 鳥海篤助訳「有識者問題」『社会科学』4-4, 1928年11月*

- 266 鳥海篤助訳「インテリゲンチア問題」向坂・鳥海訳『インテリゲンチア』1930年6月〔→II-35〕 (pp. 1~77)

- 267 〔無署名〕「レーニンの想ひ出」(1)(2)『レーニン研究』〔南北書院〕1, 1931年12月 (pp. 39~49). 3, 1932年2月 (pp. 36~48)

- 268 東日出雄訳「国際的ファシズムに対する闘争——フランクフルト国際会議に於けるクララ・ツェトキンの演説」『ファシズムに対する労働組合の闘争』中外書房, 1932年4月 (pp. 3~10)

- 269 土屋保男訳「レーニンの婦人問題論」『マルクス・エンゲルス・レーニン・スターリン婦人論』国民文庫, 1954年9月 (pp. 125~148)

- 270 平井潔「婦人問題についてレーニンと語る(1920年)」『レーニン 青年・婦人論』青木文庫, 1956年9月(pp. 9~57)
- 271 松原セツ「クララ・ツェトキン研究序説——その生涯とプロレタリア婦人運動」『北大経済学』5, 1964年4月(pp. 49~91)
- 272 五十嵐顕訳『民主教育論——労働者階級と教育』明治図書出版, 1964年10月(198p.)
- 273 松原セツ「クララ・ツェトキン研究序説(2)——クララ・ツェトキンはドイツプロレタリア婦人運動史をいかに論評したか」『北大経済学』6, 1964年11月(pp. 133~175)
- 274 現代政治思想史研究グループ訳「平和のために」『インターナツィオナーレ』〔→III-98〕(pp. 41~58)
- 275 伊藤セツ「初期コミンテルンの婦人運動方針とクララ・ツェトキンの役割——第1回大会~第4回大会のプロトコールの検討より」『北大経済学』11, 1967年6月(pp. 1~30)
- 276 伊藤セツ訳著『クララ・ツェトキンの婦人論』啓隆閣, 1969年12月(306p.)
- 277 伊藤セツ「ドイツ社会民主主義の発展過程における婦人問題にかんする理論と政策の展開」『北星学園女子短期大学紀要』17, 1971年4月〔→V-195〕
- 278 伊藤セツ「ドイツ社会民主党の婦人政策——1889-1913年」1973年4月〔→V-218〕
- 279 松原セツ・池田孝江「『国際婦人デー』の歴史に関する一考察——背景と起源」『歴史評論』287, 1974年3月(pp. 1~28)
- 280 松原セツ「コミンテルンの『国際婦人デー』指導——1924年から28年まで」『歴史評論』299, 1975年3月(pp. 1~18)
- 281 歓喜隆司・船尾日出志・鶴鷹はるみ・浜田恭代「革命的ドイツ労働運動の陶冶政策的・教育学的伝統の継承と消化と発展——W. リーブクネヒト, C. ツェトキン, E. ヘルンレ, Th. ノイバウアーの進歩的教育遺産」1976年1月〔→VI-207〕
- 282 上杉重二郎「1921年夏におけるクララ・ツェトキンとレーニン」『北海道大学教育学部紀要』30, 1977年10月(pp. 91~100)
- 283 伊藤セツ「C. Zetkinの婦人論の今日的意義——最近のドイツにおける研究動向から」『立川短大紀要』12, 1979年7月(pp. 43~53)
- 284 伊藤セツ「Clara Zetkin と定期刊行物——婦人問題及び“Die Gleichheit”誌を中心に」『立川短大紀要』15, 1982年(pp. 1~9)*

(1982年11月5日)

〔付記〕 本稿の作製にあたり, 国立国会図書館参考書誌部法律政治課長 藤田初太郎氏, 大原社会問題研究所 大野喜実氏の御協力を賜った。また, 本文献目録シリーズ(1)および(2)について, 保佐敏彦, 市原健志, 伊藤成彦, 倉田稔, 黒滝正昭, 長坂聡, 小倉利丸, 米川紀生の諸氏(アルファベット順)から追加文献の御指摘を賜ることができた。その後の調査により明らかになった若干のものとあわせて以下に掲げておく。さらに, 天野敬太郎, 入江節次郎, 松岡利道, 桜井毅, 高橋洋児, 山本佐門の諸氏からは, 文献目録作製上のさまざまな御意見・御要望をいただいたり, 誤植・誤記などを御教示いただくことができた。本稿で直ちに反映できなかった御指摘もあるが, いずれ改訂の際に再検討することにした。

以上の諸氏に心より感謝いたします。

〔文献補遺〕

- I-30 波多野鼎「ベルンシュタインの唯物史観修正と科学的社会主義の廃棄」『新カント派社会主義』日本評論社(社会科学叢書12), 1928年9月(pp. 24~45)
- I-74a 倉田稔“Eduard Bernsteins Literarisches Werk (I)”『人文研究』〔小樽商科大〕50, 1975年10月(pp. 93~98)
- I-78a 松岡利道「『修正主義』批判」『帝国主義研究』II〔→I-78〕(pp. 203~225)
- I-81 山本晴義……/同編著『マルクス主義と唯物論哲学』三一書房, 1980年6月(pp. 11~54)
- I-83a 佐瀬昌盛「マルクス主義から修正主義へ」民主社会主義研究会議編『大系民主社会主義』1, 文芸春秋, 1980年8月(pp. 91~102)
- II-129 河西太一郎……/〔訂正・増補のうえ〕『マルクス主義に於ける農業理論の発展』研進社, 1946年9月(pp. 67~131)
- II-235 久間清俊「K. カウツキーの超帝国主義論——民主主義, 社会主義論を中心として」中, 『熊本女子大学学術紀要』34, 1982年3月(pp. 39~48)

- II-236 a 横川洋「カウツキー『農業問題』(1899年)の理論構造」『茨城大学農学部学術報告』29, 1981年*
- II-237 山本佐門「カール・カウツキーの『軍縮重視論』の再検討」『北海学園法学研究』17-2, 1981年11月(pp. 43~85)
- II-238 保住敏彦「カウツキーとルカーチ——第2インターの理論家と第3インターの異端者」『マルクス死後100年』(別冊経済セミナー), 日本評論社, 1983年2月(pp. 172~177)
- III-178 a 室伏高信「ロオザ・ルクセンブルク女史のロシア革命論を読む」『共産主義と社会主義』批評社, 1926年(pp. 315~330)*
- III-184 a 住谷悦治「金融資本主義とドイツにおけるマルクス学説の発展(上)——ローザ・ルクセンブルクの『資本蓄積論』」『社会主義経済思想史』春秋社, 1929年(pp. 104~121)*
- III-286 a 伊藤成彦「ローザ=ルクセンブルクのマティルデ=ヤコブ宛書簡について」『講座 世界歴史』28(現代5), 岩波書店, 1971年7月(月報 pp. 7~10)
- III-328 a 伊藤成彦「ローザ・ルクセンブルグ——愛と革命」『愛と激動』柘植書房, 1976年10月*
- III-333 a 伊藤成彦「ローザ・ルクセンブルグとハインリヒ・ハイネ——ドイツ社会主義運動のなかのハイネ像」井上正蔵編『ハイネとその時代』朝日出版社, 1977年10月(pp. 72~84)
- III-337 a 小池田富男「ローザ・ルクセンブルク『資本蓄積論』——市場問題と帝国主義」伊藤誠・他著『経済学の古典(上)——古典派とマルクス』有斐閣新書, 1978年3月(pp. 150~166)
- III-340 a 伊藤成彦「Der Kampf Rosa Luxemburgs gegen den Revisionismus——Wiederherstellung der Revolution und Dialektik」『中央大学ドイツ文化』27, 1979年2月*
- III-354 伊藤成彦「ローザ・ルクセンブルクとベルンシュタイン——現代に生きる『社会改良か革命か?』」『マルクス死後100年』1983年2月〔→II-238〕(pp.178~183)
- IV-22 a 岡崎次郎訳『金融資本論』全2分冊, 岩波文庫, (上)1982年10月(400p.)(下)1982年11月(430p.)

Gegen das Moskauer Diktat! Rede des Genossen Dr. Rud. Hilferding auf der Landesversammlung des Unabhängigen Sozialdemokratischen Partei Sachsens zu Leipzig, am 12. September 1920.

- IV-29 a 熊谷一男訳「モスクワの独裁に抗す——ルドルフ・ヒルファディング, 独立社会民主党ザクセン地方集会における演説(1920年9月12日ライブチッヒで)」『経営論集』〔明治大〕17-3・4, 1970年3月(pp. 71~98)
- IV-35 a 米川紀生訳「資本主義発展の固有の法則性」『独占研究会資料』2, 1969年3月*
- IV-40 a 住谷悦治「金融資本主義とドイツにおけるマルクス学説の発展(下)——ルドルフ・ヒルファディングの『金融資本論』とその学史的意義」『社会主義経済思想史』〔→III-184a〕(pp. 122~146)
- IV-41 a 土田杏村「ヒルファディングの金融資本論」『マルキシズム批判』第一書房, 1930年(pp. 144~154)*／〔修訂版〕富士書房, 1948年5月(pp. 94~104)
- IV-146 a 細川元雄「Rudolf Hilferding 著作・文献目録ノート」1969年5月(15p.)*
- IV-213 a Minoru Kurata, "Rudolf Hilferding. Wiener Zeit. Eine Biographie (I)~(III)"『商学討究』26-2, 1975年10月(pp. 17~24). 29-2, 1978年10月(pp. 25~35). 30-1, 1979年7月(pp. 54~64)
- IV-243 a 伊東弘文「ドイツ・インフレーションの終焉と通貨・財政改革(1923-1924年)」(1)~(3)『商経論集』〔北九州大〕13-1, 1977年8月(pp. 69~186). 13-2, 1977年12月(pp. 45~94). 14-1, 1978年9月(pp. 37~114)
- IV-248 白川清……／『制御資本主義論——株式総合企業の経済理論』亜紀書房, 1981年10月(pp. 53~103)
- IV-252 a 馬渡尚憲「ヒルファディング『金融資本論』——帝国主義の経済的中枢の解明」『経済学の古典(上)』〔→III-337 a〕(pp. 167~184)
- IV-300 保住敏彦「『金融資本論』執筆時のヒルファディング——ヒルファディングのカウツキー宛の手紙(1902-1907)を中心に」(2)『法経論集』98, 1982年1月(pp. 151~182)
- IV-300 a 小淵港「ヒルファディングの経済民主主義論——その特徴と問題点」『愛媛経済論集』I-1・2, 1981年11月(pp. 61~75)
- IV-303 倉田稔「ヒルファディングとマルガレーテの結婚」『人文研究』〔小樽商科大〕64, 1982年10月(pp. 105~115)
- IV-304 保住敏彦「資本蓄積論の歴史と金融資本の蓄積様式」(1)(2)『法経論集』100, 1982年11月(pp. 1~42). (2)未刊
- IV-305 米川紀生「R. ヒルファディングに関する忘れられた一回想録」*
- V-166 a 保住敏彦「〈書評〉クルト・マンデルバウム『ドイツ社会民主党内の帝国主義論争(1895-1914)』(1926)」『経

済論叢】100-6, 1967年12月・

- V-215 a 市原健志「崩壊論争史」【論究】〔中央大・大学院〕5-1, 1973年3月 (pp. 1~16)
- V-239 a 近江谷左馬之介「ドイツ革命と統一戦線」社会主義協会出版局, 1975年6月 (v, 355p.)
- V-273 a 岸田尚友「ドイツ社会民主党」(時事問題解説No68) 教育社, 1978年10月 (164p.)
- V-284 a 松岡利道「第二インターのマルクス主義」平井俊彦・徳永恂編【社会思想史】2 (現代), 有斐閣新書, 1979年9月 (pp. 48~71)
- V-299 a 市原健志「『長期波動』論の理論的性格に関する一考察——『長期波動』論の生成過程に関連して」【商学論纂】22-4・5・6, 1981年3月 (pp. 313~360)
- V-301 a 市原健志「世界戦争(第1次)前夜における『長期波動』論展開の意義と限界について」【商学論纂】23-1・2, 1981年7月 (pp. 29~80)
- VI-32 a 内田忠男「オーストロ・マルクス主義——その略史と文献」【岐阜経大論集】15-3, 1981年9月 (pp. 203~218)
- VI-32 b 北村喜義「『オーストロ・マルキシズム』と民族問題」(1)【六甲台論集】〔神戸大・大学院〕28-3, 1981年10月 (pp. 92~105)
- VI-81 a 平野義太郎「ワイマル期のマルクス主義者たち」【季刊 社会思想】1-1, 1971年5月 (pp. 48~69)
- VI-136 a 淡路憲治「西欧革命とマルクス, エンゲルス」未来社, 1981年10月 (315, iii p.) →V-248, VI-129, 132
- VI-136 b 星野中「エンゲルスと『労農同盟』」【経済学雑誌】82-6, 1982年3月 (pp. 36~49)
- VI-136 c 星野中「第一インタナショナルと農民問題——続・エンゲルスと『労農同盟』」(1)(2)【経済学雑誌】83-1, 1982年5月 (pp. 18~42), 83-2, 1982年7月 (pp. 20~39)
- VI-258 a 降旗節雄「バルブスの世界資本主義論」【帝国主義論の史的展開】〔→II-195〕(pp. 68~90)

(1983年1月25日)(2月18日加筆)

〔補記〕 今回もまた西川正雄先生には格別の御高配を賜った。初校ゲラに目を通していただき、検索方法について御教示いただくとともに、不明箇所の確認にお手をわずらわせた。それらは本文中に反映することができた。御助力に感謝いたします。

(1983年2月18日)